

ぐんま自治研ニュース

No.146

2025年1月28日発行

2024 年度

1 公開セミナー 第1弾

講演1部 「インクルーシブ教育を考える ～インクルーシブ教育の現状と課題～」

東京大学大学院教育学研究科教授 小国 喜弘

講演2部 「インクルーシブな学校づくりを楽しく

～地域の学校生活でお友だちが教えてくれたこと～」

市民活動団体「笑って子育てロリポップ」代表 石川 京子

ディスカッション

「かきねのない共生社会を考える

～インクルーシブ教育の未来と今と～」

コーディネーター・・・・・・崔 榮繁

パネリスト・・・・・・小国 喜弘

パネリスト・・・・・・石川 京子

2 第39回邑楽町平和展

邑楽町職員労働組合



目 次

- 1** 講演Ⅰ 「インクルーシブ教育を考える ～インクルーシブ教育の現状と課題～」
東京大学大学院教育学研究科教授 小国 喜弘 1
- 2** 講演Ⅱ 「インクルーシブな学校づくりを楽しく
～地域の学校生活でお友だちが教えてくれたこと～」
市民活動団体「笑って子育てロリポップ」代表 石川 京子 12
- 3** ディスカッション
かきねのない共生社会を考える ～インクルーシブ教育の未来と今と～
・ 崔 榮繁 コーディネーター
(特定非営利活動法人) DPI 日本会議・議長補佐
・ 小国 喜弘 パネリスト
・ 石川 京子 パネリスト 19
- 4** 第 39 回 邑楽町平和展 邑楽町職員労働組合 39

群馬県地方自治研究センター公開セミナー

インクルーシブ教育を考える

～ 共生社会の実現をめざして ～

日 時 2024年10月20日(日)13:30～

会 場 前橋市「群馬県公社総合ビル」

第1部 講演

「インクルーシブ教育を考える
～インクルーシブ教育の現状と課題～」

東京大学大学院教育学研究科教授 小国 喜弘氏



【司会】 それでは、講演会に入りたいと思います。

まず初めに、講師の小国様の御紹介をさせていただきます。

小国様は、東京大学大学院教育学研究科を御卒業後、東京都立大学助教授、早稲田大学教授などを歴任、現在は、東京大学大学院教育学研究科教授、東京大学教育学部附属中等教育学校長、教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター副センター長を務めており、インクルーシブ教育研究の第一人者として活躍されております。



【司会】群馬県地方自治研究センター飯島評議員

それでは、小国様、よろしくお願いいたします。

【小国】 本日はお招きにありがとうございます。自治労さんに呼んでいただけたというのは、非常に率直に申し上げて、感無量な感じがする

んです。といいますのは、インクルーシブ教育の日本における起源といいたうか。一番最初にこういった問題が議論されるようになったのは、実は1979年に養護学校義務化というのが行われまして、障害を持っている子たちは、養護学校で教育を保障していこうという政策だったわけですが、同時にそれは、養護学校の中にしか障害児を入学させたいけないという形で、言わば地域の中で、友達と一緒に関わりながら生きていくという可能性を結果的に奪う政策でもあったわけです。

そのときに、養護学校義務化反対というのは、施設で暮らすのか、まちの中で、友達と一緒にけんかしたり、泣いたり、笑ったりしながら暮らしていくのか。どちらが人間としてより幸せなのかということが問われた運動だったわけですが、この自治労さんというのは、実は、まちで暮らすということが人間としての当たり前の幸せではないかということで、養護学校義務化反対を後押しされた、そういう労働組合でいらっしゃいます。

その意味で、実は、インクルーシブ教育のテーマというのは、自治労さんは1970年代ぐらいからまさに取り組んでこられたテーマということになっていて、

後で崔さんから詳しく補足があると思いますが、そういう地域で生きるということをどういうふうに実質化していくのかということをめぐる議論されている問題でもあるということ、今日お伝えさせていただけたらなと思っております。

インクルーシブ教育というと、最近、はやりの教育の新しい手法のように思われているような傾向もあるかと思いますが、これは日本において注目を集めたのは、実は障害者権利条約という条約をどういうふうにして日本で履行しているのかというモニターが、国連の障害者権利委員会によって行われていまして、その勧告が行われたのは 2022 年の 9 月なんです。

そのときに、障害者権利委員会は、日本の教育制度に対して、特別な隔離教育の制度だというふうに激しく批判し、これは産経新聞の一部を抜いてきましたが、これも、特別支援教育の体制を変革するための行動計画を立てろというふうな、日本政府に対して迫るということがございました。

なぜこういうことが行われたのかということ、少し皆様と一緒に確認していきたいと思えます。大体、このインクルーシブ教育というのが国際社会において議論されるようになったのは、実は 1990 年代からということになりまして、2006 年の障害者権利条約の中で初めて国際条約の中に権利として、障害のある子どもも共に地域の学校で暮らすという、そういう権利が規定されることになりました。

インクルーシブ教育とは、そういう意味では何なのかということ、多様な能力を持った生徒が同じ教室で一緒に学ぶことというふうな、国連の文書の中では定義されております。障害のある生徒、障害

のない生徒の両方が同じ教室にいるということであると。なぜこういうことが議論されるかといいますと、実は、これはもう皆様考えていただければ非常に分かりやすいことで、地域の、まさに共生社会というお話が先ほどございましたけれども、様々な方がいて、様々な方が同じ社会をどうやってつくるのかというのが、言わば、今、日本に限らず、ヨーロッパでも、それから、アジアでも、共生社会をどうつくるのかということ自体が課題になっている中で、その原体験をするのが学校なんだという、そういうことです。



そうすると、例えば地域社会において、障害を持っているから、この線からこっちには入ってこないでくださいねとか、障害を持っていないとされる人だけがこの線からあっちに行けますよみたいなことがあるとすれば、これは明確に差別ということになるわけですね。

ところが、学校というのは、実はそれが鍵括弧つきの能力ということになるかもしれないけれども、能力のあるなしによって、一種、線を引いて、線の向こう側に行ける人と、こちら側にいないとはいけない人というのを区別してしまっているのではないかということが大きな問題として掲げられるようになったということになります。

多様な市民が共生するインクルーシブな社会をつくるために、学校が地域の改革の拠点となる、もしくは、学校がそう

いう多様な、市民が共生するインクルーシブな社会の原体験を提供する場となるということが求められています。ですから、例えば地域構成員の参画であるとか、生徒会などの自治みたいなものと、実は非常に関連するテーマです。

ところが、日本では、障害のある子とない子が共に学ぶ制度という形で、やや矮小化されて捉えられてしまっているところがありますけれども、当然のことながら、その場をどんなふうにつくっていくのかということ、これは今度、衆議院選挙があるわけですが、被選挙権、選挙権があって、この日本社会をどうつくるのかということが我々国民にある権利であるとすれば、その原体験をする学校というのは、当然、これがインクルーシブの社会ですよという形で教師からお仕着せで与えられるのではなくて、こんな場をつくりたいです、こんな場を学校として運営していきたいですという、その希望を子どもたちが出せるということが非常に重要だということになっていますし、当然、学校の構成員、メンバーは地域の方たちであり、そして、教職員ですよね。ですから、そういった方たちの声がどういうふうに聞き届けられるのかということも、実は欧米でインクルーシブな学校ができているかどうかといったときには非常に重要な指標となっています。

ですから、例えば、見ていると面白いんですけども、インクルーシブな学校かどうかということを判断する一つの指標としては、子どもたちの意見を学校が尊重して、酌み取って、運営に反映させているかみたいなこともありますし、それから、学校の中でお気に入りの場所、例えばランチを食べるお気に入りの場所が学校の中にあるかみたいなこともインクルーシブ教育であるかどうかのチェッ

クリストの中には入ってきます。

それから、一人一人の子どもが固有名で呼ばれていて、尊厳を持った人間として教師によって認められているかどうか。これもインクルーシブな学校かどうかということの重要なメルクマールになっています。

地域社会の方たちで言えば、地域社会の人たちが学校の運営に意見を出せるような機会が保障されているかということが入ってきますし、それから、教職員であれば、まさに校長であるとか、教育行政によって、教員の意見が尊重されて、吸い上げられて、学校の運営に生かされるような、そういう手だてが講じられているかみたいなことが、インクルーシブな学校かどうかの一つの手がかりになっています。

面白いなと思ったのは、新任の教員が学校に着任したときに、学校の中を案内してもらっているかみたいなものも、インクルーシブな学校なのかどうかということとを判断する一つの手がかりです。ですから、いろいろな人たちがいて、その中には、強い人も弱い人もいたときに、弱い人が大切にされるような環境を学校の中でつくりけているのかどうかということ自体が、非常に重要なインクルーシブ教育かどうかの指標になるということがあります。

2番目の点に移りますけれども、日本では障害があるのかないのかというところにだけフォーカスが当てられがちなんですが、性差であるとか、民族差であるとか、経済的格差であるとか、能力差であるとか、多様な差異の包摂を目指していくというのがインクルーシブ教育の定義ということになっています。

さらに、これは3番目が非常に重要な視点になっていまして、日本では、例えば障害のある子と、ない子が、共に教室

の中でどうやったら一緒に暮らせるかといったときに、多くの場合は支援員を横につけて、支援員によって支援させることによって、一緒にクラスで学べますよねと。ですから、授業のやり方自体は、今までどおりのやり方が続けられるように、支援員が横で障害を持っている子供に対してどう支援するのかということが、往々にして、インクルーシブ教育の課題として語られがちなんですよね。恐らく群馬でもこういう光景がいっぱいあるんじゃないでしょうか。

自治体で一生懸命お金をつけられて、お母さんもすごく頑張られて、普通学級に障害を持っているお子さんが入ることができた。そこに、学校としては、支援員がつかないと、学校の中で一緒にではできませんよというような条件を教育委員会に付けたりして、そのことによって支援員がついて、一緒にクラスの中で学べるようになる。ところが、支援員の方は、この子のお世話をしてくださいねということだけを学校で指示されて、時間給で働く方がほとんどですので、自分の仕事は、この子の横について、この子のお世話をすることとになってしまうので、そうすると、授業の中でも、ぴったりその子の横についてお世話をしますし、休み時間も、子どもにとっては休み時間ですけども、支援員の方にとっては労働時間になりますので、休み時間もその子の横にぴったりくっついてしまう。そのことによって、せっかく普通学級に入ったのに、友達と全く関われないで1日を過ごすということは、実は今、全国のどこの学校に行っても目にする光景になってきました。

こういうのは全くもってインクルーシブ教育にはならない。むしろ、学校の改革、学校の文化だとか慣習だとか授業のやり方を見直していくことによって、友達と

友達がどういうふうに関わっていけるのかという、そういうことを工夫していくというのが、これがインクルーシブ教育の役割ということになっています。

ですから、例えばイタリアはインクルーシブ教育では非常に進んでいる国とされているんですが、イタリアでも支援員に当たる人の、日本の支援員に当たるような役割の人は雇われているんですけども、この人の役割は、その子のお世話をすることではなくて、その子と周りの友達との関係をつなぐ役割なんですよね。そういうふうにするということが一つあり、さらにメインに授業をする教員は、その子が参加しやすいような授業の手だてをどういうふうにしたら整えることができるのかということを工夫するというのが重要な役割ということになっています。



さらに、一人一人がやはり、これがインクルーシブな形ですよというのではなくて、一人一人の子どもたちの意見を吸い上げたり、それから、一人一人がかけがえのない尊厳を持った人間であるということを前提として、学校をどういうふうにして運営していくのかということが非常に重要なんだという、このところも非常に強調されている点になります。障害の人権モデルみたいに言われるのは4番目の部分ですよね。学校長になってみて、ああ、日本の学校教育は本当に不思議なところだなというふうに改めて思う

ことがあるんですけれども、それは一種工場モデルみたいなものが非常に強く機能しているというふうに思われませんか。

つまり、本来は働いている一人一人の教師というのかけがえのない人生を歩んでいる、一人一人大切な存在であるはずですよ。それから、そこにいる子どもたちも一人一人、かけがえのない人生を歩んでいる大切な子どもたちですよ。学校というのは、大切な子どもたちがかけがえのない一人一人の人生を歩んでいる様々な大人である教師たちと出会う中で、自分にとっての生きていく道というのを見いだしていくという、本来そういう場であるべきなんだと思うんですけれども、学校というのは不思議なことにそうになっていないんですよ。

そもそも、常に学校というのは問題にまみれていて、うまくいっていないんだというポイントばかりが強調され、だから、研修を受けて、教師は新しいやり方を覚えなくてははいけませんよと。教師はそういう新しい最新のやり方を覚えて、それどおりにやらなくてははいけませんよという形になっていて、現代の学校というのは、実は一人一人の教師の個性が生かせる環境ではなかなかないなという気がいたしますし、工場モデルと言いましたのは、ですから、製品工程をどう管理するかというのが今の研修の部分ですよ。子どもたちは一人一人、最終型、卒業の時点でいい製品が出来上がるみたいなイメージになっていて、学力をつけないと、いい大人になりませんよみたいな形で、「なぜこれができないんだ」、「あれができないんだ」という形で、駄目出しばかりがされていくみたいな環境ですよ。非常に不思議な前提によって成り立っている場所だなという気がいたします。そんなことを変えていこうというのが、そもそもインクルーシブな教育をどう実

現していくかというときの課題になっているんだということを、皆様と一緒に確認させていただきたいと思いました。

次に申し上げたいのは、国連の、ユネスコの文書にズバッと出てくる、「インクルーシブ教育」に関する定義の話になります。「インクルーシブ教育の利点を議論するということは、奴隷制の廃止であるとか、アパルトヘイト廃止の利点を議論することに等しいと考えられる」と、こういうふうに書いてあります。つまり、日本では、例えば教育関係者の方と議論すると、「いや、おまえね、それはインクルーシブ教育の意義って分かるよ。大事だよ。それって共生社会を実現することだよ」と、どの教師の方も大体おっしゃいます。

同時に次に言われることは、「だけど、障害のある子と障害のない子を一緒にしたら学力って下がらない？」ということです。それから、「障害のない子と障害のある子を一緒にすると、何かいいことがあるの？」という話になります。こういう話自体が一種差別なんだというのが、ここで書かれていることになるわけなんです。つまり、「アパルトヘイトを廃止したほうが社会のGDPは上がるでしょうかとか、奴隷制を廃止したほうが社会はより効率的になるでしょうか、もしくは社会はより安全になるでしょうか」みたいな問いはあり得ないですよ。であるにもかかわらず、障害を持っている子と持っていない子を一緒にするというものについては、そういった議論が平気で起きてくるというのが今の日本の現状です。

実は70年前に同じようなことがございました。日本が第2次世界大戦で敗戦して、そして、日本が占領下に置かれたときに、男女共学というのが初めて実現することになります。これは日本が自主的にやった改革ではなくて、時の占領軍で

あるGHQによって男女共学というのを強制されることになるわけです。

ですから、当然のことながら、日本の教育界、もしくは大人たちは非常に反発いたしました。男子学生、戦前の社会というのは、小学校でも、中学年ぐらいからは男組、女組に分かれていて、中学校ぐらいになると、もう完全に行く学校も別みたいなの、そういう状況だったわけですよね。男子学生と女子学生を一緒にしたら、男子学生の学力が下がるんじゃないかという議論が本当に真剣に心配され、新聞なんかの論調の中で、そういった記事が飾られています。これはぜひ、今、新聞検索、簡単にできる時代になりましたので、御家庭に帰られて、有料になるかもしれませんが、新聞記事を検索していただいて、「男女共学反対」といったキーワードで、1945年から1948年ぐらいの議論のところを朝日でも読売でも検索していただくと、そういう記事がたくさん出てきます。

これは今やどなたが聞かれても、それって女性差別じゃないの？とおっしゃると思います。

こういう話をすると、「いや、だけど、男女と差別の問題と障害児差別の問題は違うよね」とおっしゃる方も結構いらっしゃいます。これはこの間、弁護士さんとお話をしても、「いや、あんたね、それはちょっと違うんじゃないの？」とおっしゃっていました。だけど、当時の議論では女性は能力が低いとされていました。ですから、女子と一緒にすると男子の学力が下がるはずだと思われていたわけです。今も実は「障害児」とされる子どもたちは能力が低いとされているわけです。だけど、これは本当に能力が低いのか高いのかというときの観点自体は非常に限られたものだと思われませんか。例えば数学ができる、算数ができるか、

できない、国語ができる、できない、漢字が読める、読めないとかですよ。ところが、それはそのことが、まさに皆様に考えてみていただいて、この中にもいらっしゃるんじゃないでしょうか。小学校ぐらいの算数はできたけど、中学校になると分からなかったよねとか、ああ、私は国語が苦手でいつも赤点だったとか。そういう方たちが社会生活で困っていらっしゃるでしょうか。全然困らないですよ。

その意味において、実はテスト学力なるものによって、分けるということ自体が妥当なのかどうなのかということ自体がそもそも問われるべきということになりますし、例えば憲法の中に、そういうテスト学力によって子どもを分けるということが正当化されるような条文を見つけることはできないわけですよ。

それから、もうちょっと言いましょう。何をもって障害とみなすのかというのは、その時代のマジョリティの人たちが当たり前とする能力の中で、マイノリティが持っている特性が障害となるわけですよ。



私の職場の同僚に、星加良司さんという視覚障害の当事者の研究者がいます。その方がよく言うのは、「例えば日本が車椅子ユーザーの国だったらということ、小国さん、考えてごらん」というふうによく教えてくれます。車椅子ユーザーの国であつたら、例えば、今日は、ここはホールですから天井が高いですけども、210センチとか250センチぐらいが今の

天井の平均だと思いますけど、そんな高い天井は必要ないわけですよ。つまり、車椅子で移動するわけですから、百数十センチあれば、当然のことながら移動ができるわけですから、建設費のコストダウンということで言えば、150センチぐらいに天井を区切るというのが妥当になるわけですよ。そうすると2足歩行する少数者というのが障害者になるよねというふうに言えます。

じゃあ、障害をどう克服するのかということが課題となったときに、車椅子ユーザーになるように足の手術をしなきゃいけないんじゃないかみたいな極端な議論だって起こりかねないのが、実は障害とされる人たちの直面する世界なんだと、星加さんは言います。「二足歩行が当たり前の国の中で生きているから、実はそういうことに多くの人たちは直面していないだけなんだよ」と。そんなことが恐らく社会の中でたくさんあるということになるだろうと思います。



もう一つだけ付け加えますと、実は、いまだに発展途上国などで女性の教育を受ける権利が保障されていない国はたくさんございます。その意味において、インクルーシブ教育といったときに、国際的に多くの国で最重要の課題とされているのは、実は男女共学なんだという議論もあるということも付け加えておきたいと思うわけです。その意味において、多様な差異の包摂というのは人間が平等な

人権を持つことに由来しているのであって、インクルーシブ教育で学力が下がらないかといった議論は、これは人権理念に反するということです。

さらに付け足しさせていただいていいですか。くどくなっているかもしれませんが、ここは大事なところだと思うので。実は日本の立てつけというのは、障害の種別と程度ごとに最適な学びの場というのがあって、その最適な学びの場にそれぞれの子どもを配置していくというのが、これが非常に発達の上で最も重要なことなんだと。子どもたちの発達を促していくためには障害の種別と程度に応じて学びの場を分けるということが大事なんだというのが日本の伝統的な教育の考え方なんです。

ところが、不思議なことにこの仮説を実証する大規模調査というのが日本では一つも行われていません。つまり、障害の種別と程度ごとに分けたほうが何となく効率が上がりそうだというのは、俗信というか、何となく一般的イメージにすぎないんだということですよ。ここが非常に大事な点なんです。

ところが、アメリカとかイギリスになりますと、大規模調査がたくさん行われていまして、実はその中ではインクルーシブな環境のほうが学力も上がったという調査はたくさんあるんです。これはなぜかといいますと、これは私自身もそうなんですが、皆様の被教育体験を思い出して見ていただくとお分かりいただける話なんです。小学校時代と中学校自体を振り返ってみて、何が一番、我々を成長させたかといえば、それは本当にいい授業だったり、すばらしい先生とのすばらしい授業の出会いだったかと言われると、意外なほどそうでもなくて、実は友達との間での様々な交流が、自分の成長を促したなという思いのほうが強く持

たれるのではないかと思います。

実はそのことの国語版だったり算数版だったりもあるわけですね。友達同士で教えたり、教えられたりみたいなことが自然に起こる教室のほうがはるかに学びの効率も上がるわけです。ところが、今、日本の学校で何をしているかといいますと、能力主義による授業分けがされていたりします。ぐんぐんコース、ゆっくりコースとか、何か欺瞞的な名前がつけられたりしていますけれども、速いコースとゆっくりなコースに分かれる。これも一種の能力主義ですね。そういう能力主義編成のクラスの中で、自分のことは自分でやりなさいということ自体が、いろいろなところで強調される環境の中に子どもたちは生きています。

結果として、何が起きているかといえば、これはベネッセと東京大学の社会科学研究所というところが合同で、2万人ぐらいの若者に調査いたしました。今の10代の子どもたちというのは、実は、分からないことがあったときに、友達に聞けない子ども、何%ぐらいいると思われませんか。調査結果です。70%です。先生に分からないことがあったときに聞けない子ども、何%ぐらいいると思われませんか。60%です。つまり、学力向上、学力向上と言っているながら、実はそうやって階層別に分けて、さらに自分で自分のことはちゃんとできるようになるまで努力しなさいねという中で何が起きているかといえば、そういう階層別に分けられた上で自分のことをやらなきゃいけないから、友達にも先生にも聞けないで、分からないことが分からないまま過ごさざるを得なくなっているという子どもたちの姿なんです。

障害を持つ子を別の学級に入れるということで、これはアメリカでも日本でも同じことが報告されています。

何かといえば、次は自分が特別支援学級にやられるのではないかという恐怖心ですね。つまり、安心して教室の中にいるということ自体が、実は周りの子どもたちにとってもできなくなっているというのが今の日本の学級の姿です。

なぜかといえば、ちょっと立ち歩いたら、あれっ、多動かもしれないとか言われて、保護者が呼び出されて、医者に連れていかれるわけですね。お医者さんが言っていました。自分たちのできることというのは、目の前の子どもを見て、診断名をつけて、薬を出すことしかできないと。児童精神科医の専門家が言っていました。特に今、増えているのは発達障害ですね。つまり、発達障害というのは、結局は、例えば何によって起きる。脳の機能障害ということに一応なっているわけですが、これは医学書をぜひ、医学書と言わなくても、新書で発達障害について書いてある本、ちょっと詳しい本を見ていただくと大抵書いてあるのは、脳の機能障害という定義は仮説なんだ、医学的には証明されていないというのは多くの本に書いてあります。

素人考えで私は思っていたんですけど、脳波を取れば分かるんじゃないかとか思っていたわけです。ところが、脳波を取っても、脳のCTスキャンを撮っても、確かに発達障害の子の脳波を撮ったときに、何かこんなところが反応していて、この辺が反応していないみたいな、そういう、ある波形の特徴というのは出るんだそうです。

ところが、その脳波の特徴を持った子が全て発達障害なのかというと、そうじゃないというんですね。ですから、これは脳波によってとか、脳のCTスキャンを撮っても実は証明することはできないというのが、医師の、お医者さんが書いた発達障害関係の新書を読むと大抵出てく

る話です。脳の機能障害で、これは特別な訓練をしなきゃいけないと書いてあるのは大体、特別支援教育系の教師や教育学者が書いているもの。



ですから、この話をし出すと長くなってしまうのであれですけども、実は立場によって書いてあることはかなり違います。そういう意味で、例えば落ち着いて座ってられないとか、例えば、その症状にしたとしても、授業がつまらない可能性もあるじゃないですか。そもそもですよ。(笑) それから、家で本当にネグレクトを受けているというケースもありますよね。だから、落ち着いて育ってこなかった。

今、もっと本が出ています。『ルポ スマホ育児が子どもを壊す』という本が最近出ています。お母さんとかお父さんの中には、もう忙しいので、このスマホの映像、YouTubeを見せておけば、静かに寝てくれるとかね。そういう御家庭は今、非常に増えているんだそうです。そうすると、1日に子供が受けている言葉の数自体が、実は1日をとっても1,000倍も2,000倍も違うということが平気で出てきているわけですよ。つまり、ほとんど大人の言葉かけなしにスマホだけ見せられている子どももいれば、「いないいないばあ」をしてもらったり、「ああ、笑った、笑った」と一緒に笑ってくれたりみたいなことが、起きている時間ずっと続いている御家庭だって当然あるわけですよ。

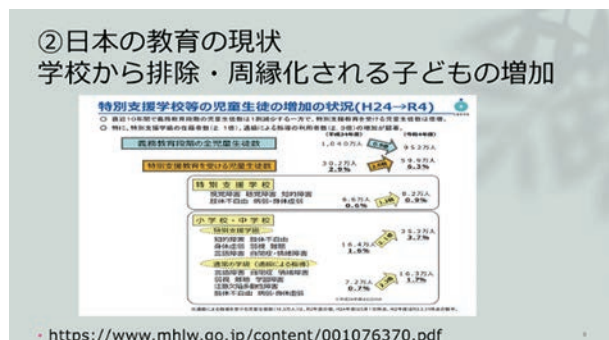
この間に、例えば言語の発達の違い、感情の発達の違いが起こらないほうが不思議ですよ。子どもの育つ場所というのは家庭と保育所しかないわけですから、保育園もしくは幼稚園ですよ。子どもがずっと家にいるというケースもあるでしょう。そういう状況の中で、保育園だって、保育環境というのは、実は行かせる保育園によってかなり違うというのが実情ですよ。

お医者さんもおっしゃいます。「本当はそういうところまで行って、どんな家庭で育っているのか、どんな保育園なのかとか見てみたいんだ。だけど、そんなことをしたって保険の点数にならないから、僕はそんなことをしていれば生活ができない。だから、目の前に来た子どもを10分で診断しなきゃいけない。10分で診断するというときには、この子がどんな症状を持っているのかという生活状況を聞き取ることしかできない。聞き取って、目の前にいる子どもが困っている。何か症名をつけてくれと言って、医者に来ているんだから、症名をつけてあげて、薬を出してあげるとのことしか僕にはできないんだ」とおっしゃいます。

そういう世界の中で、実は発達障害という診断名がつけられているということが一切ブラックボックスに入れられて、「ああ、あの子は発達障害だから、特別支援学級だよ」とかいう形で、別のコースが用意されてしまう。これが現代に起きている一つの排除、学校における子どもたちの排除なのではないかというふうに考えていく必要があるということですよ。

さらに、こういう話をさせていただくと、「じゃあ、重度の知的障害の子どもはどうなの?」という話になります。「重度の知的障害の子どもが教室に入っていて、何も分からない状態ってかわいそうじゃ

ないの？」と。こういう質問には、皆様、
 どうお答えになれますか。



だろうかという問題があります。周りの友達に何かを頼むというチャンスにどれだけ恵まれるんでしょうかと言ったら、実は全く恵まれないといってもいいのではないのでしょうか。漢字が一字、多く書けるようになりました。算数の 1 桁の計算ができるようになりましたといったところで、これに本当にその人の人生を左右するような意味が今やあるのかということなんです。



だって、計算機さえ使えば計算なんて何桁でもできてしまいますし、コンピューターに向かってマイクで「2 足す 2 は？」と言えば、ちゃんと答えてくれるみたいな、そういう時代でもあるわけですよ。

その意味において、実は学校でしかできないことというのが、変わってきたと思われませんか。学校でしかできないことは、実は友達同士の中で、頼ったり頼られたりすること。さらに言うと、実はけんかするということから学ぶことって実はすごく大きいと思われませんか。

ところが、今や子どもたちの遊びの空間というのが見事に破壊されてしまいました。というか、なくなってしまうよね。学校で初めて友達と出会えて、家に帰ったときに、例えば友達遊びに来るとか、公園で遊ぶとかということがようやく成立する。私が行っている長野県の人口 5,000 人の村があるんですが、そこは小学校が 1 校しかありません。全

校生徒 200 人弱の学校です。ところが、家に帰ると、もう友達と友達との距離は自転車で行けるような距離ではなくて、今やもうオンラインゲームでしか家に帰ったら遊べないんだそうです。これはやや極端な例かもしれませんが、今や学校でしかできないことは、実はそういう友達と関わるということになっているのではないのでしょうか。

実は、勉強のほうは、ユーチューブを見れば一人でもできるという不思議な時代に入ってきているわけですよ。しかも、学校の先生が教えるより、そう言うと失礼、ここの中に先生がいらっしゃったらお叱りを受けるかもしれませんが、学校の先生が教えるより、はるかに説明としては分かりやすい動画がユーチューブでできています。それは当たり前ですよ。小学校の先生は授業を二十数時間、週にされます。中学校の先生でも 18 時間から 20 時間、授業をされます。そのためにどれだけ準備ができるかといえば、実はこの多忙化の中でほとんど準備する時間を法定労働時間の中では取ることができない。これはブラック労働の背景にもなるわけですけど、例えば 45 分の授業に、45 分準備ができるということはほぼない。

そういう状況の中で考えたときに、ユーチューブの動画は 1 時間の動画をつくるのに、恐らく 10 時間も 20 時間も準備している人だっているわけですよ。同じ人間であれば、当然のことながらそちらのほうがいい授業になってしまうみたいなことが起きているということになるのかなと思います。

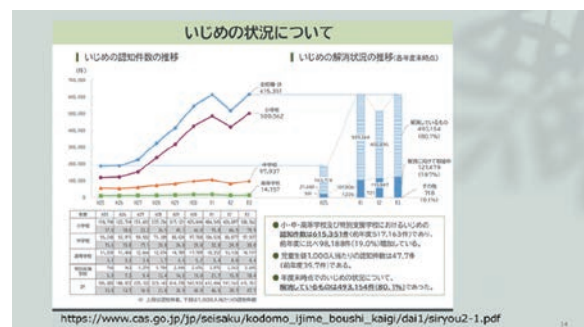
次に日本の特別支援教育の現状はどうかということと実はこの 10 年間ぐらいで 2 倍ぐらいに増えています。特別支援学校も増えていますし、特別支援学級も増えています。

先日、埼玉県の特設支援学校へ行ってきました。その学校は、10年間で生徒数が2倍になったんだそうです。「じゃあ、生徒はどんなふうになりましたか」と聞くと、「10年前は、小学校1年生で座っていることもできないし、教師の言うことも聞けない子がたくさんいました。ところが、2倍になった今は、ほとんどの子が座れますし、先生の言うことも聞ける子が特設支援学校に来るようになっていきます」ということです。

つまり、障害であるのか、障害でないのかというのは、特に発達障害になると、周りの目がどれだけ厳しいかによってあぶり出されてくるということになりますよね。

実は不登校の子どもも増えているし、それから、いじめの数も増えているし、教師のバーンアウトみたいなものも増えているという、こういう状況がございます。つまり、学校が、この10年間、非常に子どもにとっても大人にとっても生きづらい場になってきたというのが今の実

情ということです。学校全体が閉塞感を増してきたということがあります。



そのときに、実は普通学校・普通学級ににいるということ自体がしんどくなっているのに、不登校特例校をつくってみたり、学校の中に不登校の子どもの居場所をつくってみたり、それから、通級指導とか特別支援学級を充実させてみたりみたいな形で、一種の隔離教育システムを充実させてきたというのが日本の教育改革の歴史ということになります。

すみません。時間を間違えまして、10分以上オーバーしてしまったように思います。申し訳ありません。これで終わりにさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

第2部 講演

「インクルーシブな学校づくりを楽しく ～地域の学校生活でお友だちが教えてくれたこと～」

市民活動団体「笑って子育てロリポップ代表 石川 京子氏



【司会】 続きまして、石川様に御講演をいただきます。

石川様は、重症心身障害児である知果ちゃんを育てるお母さんであり、障害のある子どもの保護者でつくる「笑って子育てロリポップ」の代表として、垣根のない共生社会を目指し、群馬県を中心に活動しております。

それでは、石川様、よろしくお願ひい

たします。

【石川】 皆さん、こんにちは。まず自己紹介からさせていただきたいと思ひます。

その前にちゃんと、皆さん、お忙しい中、お集まりいただき、ありがとうございます。今日はお休みなのに本当に申し訳ありません。ちょっとだけお話しさせていただきます。

まず自己紹介です。私は、「笑って子育てロリポップ」の代表の石川京子と申します。娘は、見てのとおり、車椅子、これはバギーと言うんですけど、バギーに乗って生活をしています知果です。小学校6年生です。この子がいつも脇のところの骨に手が入ってしまうので、それを防ぐために、いつも抱っこしている、この子は石川スグルといいます。よろしくお願いします。

なぜ私たち親子がここに呼ばれたかといいますと、この子は重度の障害があって、知的も重度ですし、医療的ケアと、最近よく新聞にも出るんですけども、おなかから御飯を注入して食べる医療的ケア児であります。なのですが、通っている小学校は特別支援学校ではなく、地域の小学校に通わせていただいています。学校が名前を言っていないよと言ってきているので、高崎市の金古南小学校です。

私は、その学校にこの子を入れて、毎日、この子を送っていくんですけども、とても楽しくて、うれし過ぎて、恩返しをしたいということで、PTA会長に立候補させていただいています。この子がどれだけ恩返ししたかったかなというのは、これからスライドを見ながらと思います。

じゃあ、まず、知果が生まれたのは今から12年前です。細菌性髄膜炎という病気に10日目になってしまって、それからこういった重度の障害を負ったわけです。泣いてばかりから、楽しもう、きっかけというところですけども、とにかく2年、3歳になる前ぐらいまで、もう本当に家で泣いてばかりで、病院と家の行き来をするだけでもう目いっぱいでした。

小児医療センターという病院に行くんですが、そこで知り合ったお友達と、当時は情報も全然ないですし、ネットで情報を探しても暗い情報しかないの、やっぱりリアルなお母さんの情報がすごく自

分には響くんだなというときで、お母さんたちとランチ会をしたいなとちょうど思っていました。その頃に、高崎にあります二葉特別支援学校の隣に群馬整肢療護園というところがありまして、そこいらっちゃんクラブという、私たちみたいな障害を持った子の親子が遊びに行く場所があるんですね。そこでお母さん同士、同じようなお母さんたちに出会ったときに、もう本当に目の前が開けたといいますか。

というのは、らっちゃんクラブがあまりにも明る過ぎて、よく言う底抜けに明るい職員さんたちがいらっしゃるんです。その職員さんにつられてお母さんたちもすごく元気になって、みんなでランチ会をすると行って出かけたときに、相談したいことはたくさんあるんだけど、どこに相談していいかも分からないし、こんなことでいじけていたら、母親として失格なのかなみたいな、もう自分を責めている部分もあったんですね。だけど、やっぱりお母さんたちとランチ会へ行って、ちょっと相談すると、「そんなのあるある、あるあるだよ」みたいな形で、先輩お母さんが励ましてくれる、励ますというか、普通の会話ですよ。『大丈夫、大丈夫、そんなことがあっても大丈夫、うちもそうだよ』みたいな形で、ああ、このお母さん同士のランチ会ってすごくいいなと思って。それがきっかけで、私は、笑って子育てロリポップというお母さんたちのランチ会を続けることにしました。



ちょうどそのときに会ったロリポップのお母さんたちが、子どもも地域の保育園に行かせていたんですね。障害が重たくても、やっぱり地域の学校、保育園、またはこども園に行かせたいということがあって、うちはちょっと、みんなよりも知的が重いから無理かなと思っていたんですけど、年長さんの年に交流させていただいたんですね。今で言うと、星の光こども園と名前が変わったんですけど、うちの近くにあるこども園に行きました。そうすると、子どもたちが、びっくりすることに、本当にバリアフリーな気持ちと言うんですかね。この子が障害があるということに全然驚かないんですよ。それにすごく私は驚いて。



というのは、「知果ちゃん、これ、何、乗っている？」、「バギー乗ってる」と、先生が、これ、バギーと言うんだけど、車椅子と言うんだけど、バギー、まあ、どっちでもいいや、そういうのに乗っているんだよと、ただそれだけ。「ここに乗って、みんなと一緒にどこでも行けるんだよ」と、そのときにこども園の先生が言ってくれたんです。そうしたら、それがうれしくて、また次の週も次の週も遊びに来ていいよということで、遊びに行ったんですけど、子どもたちが、知果はたまたまこういうのに乗っているだけで、あんまり深いことを聞かないんですよ。毎日、この子と一緒に触れるのを楽しみにしてくれているという。

そのお友達が行く小学校から、年長さんの、お盆が明けた頃に、就学前健診という紙が来たんです。金古南小に来る人は健診を受けてくださいという紙だったんです。私、それをもらったときにすごくうれしかったんです。「えっ、うちの子、地域の学校に行っているのかな、手紙が来たから行っているのかな」と思って。やっぱりそのときに、ロリポップのほかのお母さんは、「こんなの、ばかにしているよね。市役所から、こんなに重い障害があるのに、地域の学校に来なさいって紙があるのよ、これ、どういうこと？」みたいな形で怒るママもいたんです。「まあまあまあ」、私みたいに、「えっ、これ、行っているの？」って。そのときに、私、気づいたんです。子どもの体の状態だとか、脳が、知的が軽いだとか重いだとか、そんなことじゃなくて、お母さん、家族がどういうふうに育てたいかというところで、学校の選び方、行く道が決まるんじゃないのかなというふうに思ったんですね。

それから、地域の学校の就学前健診というところに行くわけですよ、知果と私が。親子がズラッと並んでいて、1年生になる前の親子が並んでいるんですけど、行って、ちょっと失敗したかなと思ったのは、誰も車椅子がいない。バギー乗っている子が一人もないのに、私、連れてきちゃって、もしかして何か、「あのお母さん、ちょっとおかしいんじゃないの？」と言われるのかなと一瞬思ったんです。

だけど、すぐに、さっき言った星の光こども園のそこで会ったお友達が4人、知果のところに、サササッと来て、「何で知果ちゃんがいるの？」、「いやあ、この学校に来ようかなと思って、入ろうかなと思って」と言ったら、お友達が、「いいよ、いいよ、一緒に入ろう」ということで、私、

そのとき決めたんです。もう絶対、この学校に入ろうと。ここにこういうお友達が一緒にいてくれるんだったら、この学校、通おうと思って。それで、私は、金古南小にこの子を入れる、家族で決めて、入れることにしました。

そのときが1年生で、まだコロナじゃなかったんですね。だから、あれです。運動会のときに、『ドラえもん』の曲をみんなで踊りました。これで、分かりますか。ハートがある下のところにいるのが知果で、その後ろを同じ1年生のお友達が全力で走ってくれました。これでフォーメーションといって、こっち側にいた子たちがこっち側に、こっち側にいた子が向こう側に行くというフォーメーションの入替えをしたんですね。そのときに、風を切って走るのを見たら、もううれしくて、うれしくて。そのときいた教務の先生が、「車椅子ってあんなに速いんですね」みたいな、そんなような感想をいただいたのを覚えています。

1年生のときは、高学年のお姉さんたちがお手紙を書いてくれたりね。「知果ちゃんへ、ドラえもんのダンス、頑張っているね」とか、「知果ちゃん大好き、ラブ」なんて、こういう手紙が知果のランドセルの中に入って、毎日持ってきてくれました。ああ、いいな。字が書けるお友達と同じ学校に行くというのは、やっぱりうちはよかったなと思って、こういうお手紙にほっこりしていました。

1年生に入ったときに、ちょうどたくさんここに人がいますけど、担当者会議と言って、たくさんの方が来てくれました。その頃はまだ医療的ケア児支援法というのがまだ成立していなかったの、施行されていなかったの、まだまだ手探りの部分がありました。もちろん今も手探りですけども、今まで来てくれている訪問看護師さんや、学校の後に通う学

童みたいなのところがあるんですけど、障害の子たちは、放課後等デイサービスというところに通うんですが、そういうところの方が来てくれたり、あと、特別支援学校のアドバイザーの先生も来てくれました。そうすると、小学校に行っても、特別な支援を特別支援学校の先生にいろいろアドバイスいただけるということで、安心して学校に行くことを決めました。

ただ、ここからです。コロナになって、コロナが蔓延しました。そうなってくると、この子たちは重症化してしまうので、ほとんどが学童みたいなのところ、放課後等デイサービスというところで、この子は5年生まで、そちらに長く通って、たまに学校に行くという状況でした。それで、私、この子が3年生のときにちょっと不安だったんです。もしかしたら、せっかく仲よくなってくれたお友達が知果のこと、忘れちゃうかもしれないと思って。それで、校長先生にお話したんです。「何か私にできることないですかね」と。そこで、インクルーシブ教室というのをさせていただきました。

それは、ここにある写真ですけど、車椅子を持って行って、みんなに乗ってもらう、同じ年の子に乗ってもらう。そのときに、大人用の車椅子じゃなくて、知果たちが乗っている子供用の車椅子だったり、バギーに乗せて、それで、「みんなに乗ってみたい？」ということで、体験をみんなにしてもらいました。

そのときに、こちら側の向かって左側の下の写真ですけど、ユニバーサルシート、後で御説明しますが、この子たちがおむつ替えをする、ベッドを乗せた車を持って行って、ユニバーサルシートってこういうもの、こういうものがあれば知果ちゃんたちはイベントとかお出かけに行ったときに、みんなと一緒に遊べるんですということを言いたくて、これに

乗って、行きました。



こっちで、車椅子3台用意して、3年1組さん、2組さん、3組さんとあるんですけど、一気に説明するのかなと思ったら、学校の先生が、1時間目が1組さんで、次、2組さんでということで、3時間、学校で説明させていただいたので、本当に知果の同級生とはこれで仲よくなったなと思うきっかけです。

それから、コロナがそろそろ明けるぞという頃がちょうど去年の5月。上のほうの写真ですけど、これはみんなで林間学校に行きました。林間学校に行って、思い出がたくさんあるんですけど、大きなお風呂にみんなで裸で入ったり。お泊まりだったので私は一緒についていきました。そのときに、お泊まりなので、親は水着を着るのか、それとも、みんなと一緒に裸の付き合いをするのか、すごい悩んじゃって。

でも、悩んだときに思いました。一緒に入る友達に聞けばいいんだと思って、「チカママ、あれかな。水着かな。それとも、みんなと一緒に脱いだほうがいいのか」みたいに言ったら、「いやいや、何で水着着るの？ お風呂でしょ」って5年生に言われたんですね。「そうだよね。何言っているんだ」と。分からなかったら何でも聞けばいいんだと思って、ということで、すっぽんぽんでみんなで入りました。ちょっとダイエットが間に合わなかったの、この辺が絞れていなくて、みんな

にちょっとモミモミされたりした覚えがあります。

今年になりまして、修学旅行に行ってきました。修学旅行ですけど、この子は医療的ケアと先ほどお話ししました、看護師さんがいないと御飯が食べられないんです。家族か、または医療に準じていると言うんですか、先生とか看護師さんとか、そういうお医者さんじゃないと御飯を入れることができないんですね。ということは、お母さんがついてくるのかなと思ったんですけど、高崎市の場合は、よく知果がお世話になっている、先ほど言った放課後等デイサービスの看護師さんが1泊2日の修学旅行についてきてくれました。

何がよかったかというと、鎌倉に行っただんですけど、この鎌倉に行ったとき、みんな、班別行動というのをするんですね。私のときもしたんですけど、何かイメージしますかね。そのときに知果と私は別の班だったんです。だから、知果は、介助士さんと担任の先生と、あと、何人かのお友達と班行動して、私は手ぶらで違うお友達と班行動するという。知果の班が一番遅いのかと思って、チェックポイントのところに、「あれですか。知果、まだ来ていないんですか」みたいな。「いやいや、お母さんの班が一番遅いです」みたいな。「あっ、私が足を引っ張っているんですね。すみません」みたいな形で、もう知果はお友達と一緒にもうどんどん鎌倉を旅して、知果のチームの中には、児童養護施設のお友達もいたりするんですね。

高崎の知果が行っている金古南小学校のゆうあい学級にはいろいろな子がやっばりいます。私はロリポップの代表をしているので、重度なお友達に慣れているんですけど、発達の子もいたり、養護施設に通う子も来ていたりするんですね。

ゆうあいのクラスイコール障害というイメージがやっぱり大人になるとあるんだけど、重度の障害に慣れちゃっているものだから、この子のどこに障害があるんだろうとか、もうそんなこと言っていると、障害って何だろうみたいな、もう1回考えちゃったりして、障害という文字、要らないなと最近思っているんですけど。

例えば知果が障害児のとかよく言われるんだけど、何か別に、足門に住んでいるんですけど、足門の中学の知果ちゃんでもいいんじゃないのかな、別にわざわざ障害のある知果ちゃんと言う人は最近いないなと思ったんです。ということは、どういうことかということ、よく地域に溶け込むとか共生社会とあるけど、私たちもちゃんと地域で遊んでいなければ、やっぱり名前も覚えてもらえないし、何となく障害のある子だよなみたいな、なんか、こそつと言われちゃうなというふうに思ったんです。

じゃあ、いつから地域に溶け込めばいいかと思ったら、やっぱり生まれたときから。生まれたときにやっぱり分けられちゃうんですよね。だからもう、地域の学校に行くのか、それとも特別支援学校に行くのかと、そこの問題じゃない。もっと前の、生まれて赤ちゃんになった時点でもう分けられちゃっている。まずもって情報がないし、ちょっと障害があると、ごめんね、私ちょっと詳しくないんだと保健師さんに言われたことがあるんです。いやいや、私も初めての子だし、さっぱり分からないしと思って。だからって、分けて育っていくと、それが悪いというわけじゃないけど、やっぱり特別扱いされないとお母さんも満足できなくなっちゃうんですよ。そうすると小学校のときに、「地域、いいよ、今、インクルーシブとかはやっているから地域、行こうよ」

と言っても、怖くて、とてもじゃないけど、自分んちの子を地域に預けるということは多分しないと思います。



世の中がインクルーシブに、地域密着とか共生社会と言っているけど、やっぱりお母さんたちの声に耳を傾けて、今の時代はまだ選んでいいと思うんですよね。まだ不安があったら特別支援学校だし、さっき小国先生がおっしゃいましたけど、本当に軽めの子が特別支援学校に行っているというケースにだんだんなっています。「うちはこれだけ重いから特別支援学校に行かないと損じゃないのかな」と言われがちですけど、いや、そんなことはなくて、知果は意外と、ふだん何しているかということ、4年生のクラスとか2年生のクラス、6年生のクラスに行ってお邪魔しています。

さすがに国語とか算数とかはできないんですけど、知果がやっている授業は、ありがちな音楽。音楽をみんなで耳から楽しんで、いろいろ振動をもらったりしています。あとは体育。私は特に、知果はプールには入れないんですね。やっぱりプールのお水、寒いから。だけど、プールサイドのパシャパシャパシャとか、ピーッとか、ああいう音を聞かせたいから、知果はプールに行かせる。だから、知果はみんなと一緒にプールをしたり、サッカーをしたり、バスケットしたり、高跳びをやったりとかしています。あとは英語もやっています。英語の授業はも

うニコニコで、しゃべれるんじゃないかというぐらいの表情をするらしくて、なるほどね、何でもさせてみるものだなと思いました。

それで、動画をぜひ見ていただきたいなと思うんですが、来週の水曜日に運動会があるんです。最後の運動会です。そこで、今まではあれです。学校の担任の先生が、「よーいドン！」で徒競走のとき、こうやって行きますよね。それで、一番最後で遅い子とかがいるんだけど、その遅い子を先生が大人の事情で、抜くか抜かないか、抜くか抜かないか、抜けなかった、最下位みたいなことを毎年していたんですけども、そうじゃなくて、もうちょっと知果ちゃんがみんなと一緒に参加できること、ないかなみたいなことで、6年生の先生がみんなに問いかけていました。たまたまそのときお迎えだったので聞いていたんですけど、「知果ちゃんと一緒に徒競走できることない？」と先生が言っていたら、「はい」と。みんなで一緒にゴールを踏むとか、ちょっと大きめのハンデをつけるとか、あと、先生が担いで走るとか、いろいろな発想をしていたんですけど。(笑) 来週の水曜日には、みんなで、知果が1レーンだとすると、2レーン目をバギー、3レーン目もバギーということで、1レース走ることになりました。

そのときの練習の様相があるので、ちょっと。これです。全部で5台あります。



実はこのバギーは、知果のお友達の特別支援学校のお友達が快く貸してくれました。まだみんなもどのくらいのスピードを出していいかわからないという。使ったものは自分たちで片づけると言うんですけど、バギーを健常の子がこうやって囲んでいるという姿が私にはすごく幸せな時間を感じます。やっぱりお友達という関係がなければ、こういう状況はなかなかできないんじゃないかなと思うんです。でも、大人が声をかけてくれば、すぐ子どもたちは自分たちのアイデアで、こうやっていろいろ動くことができます。今5台のバギーをお借りしています。来週の水曜日には、みんなで校庭を思い切り走れるんじゃないかなと思って、私は楽しみにしています。

インクルーシブな学校づくりというところですけども、いろいろまとめて書こうと思ったんですが、一言で言うと、絶対に楽しんで学校づくりはやったほうがいいかなと思います。だから、地域の環境づくりだって、机で、みんなで難しいことを考える。この子はこういう障害があるからこうしたらいいんじゃないかとかじゃなくて、この子はどういうお友達とどんな遊びをしたいんだろう、どんな学びをしたいんだろうと。もっと簡単に考えたら、答えはすぐ出るような気がするなと私は思っています。だから、分からないことは教えて、それから、できないことは一緒にやろう。とても簡単なことなんです。だけど、大人はなかなかそれができないです。そういうことを知果と一緒に遊んでくれたり、学んでくれている子供たちに教えてもらっているなと私は思います。

知果が病気になって、一時笑えないときもありました。それでも、知果と一緒に外に出かけると、いろいろな人に出会います。そうすると、その人のすごく優

しい部分を見ることができます。だから、私はこれからもそういった優しさを大切にして、笑って、子育てしていきたいな

と思います。

以上で私のお話は終わりにしたいと思います。(拍手)

第3部 ディスカッション 「かきねのない共生社会を考える ～インクルーシブ教育の未来と今と～」

コーディネーター

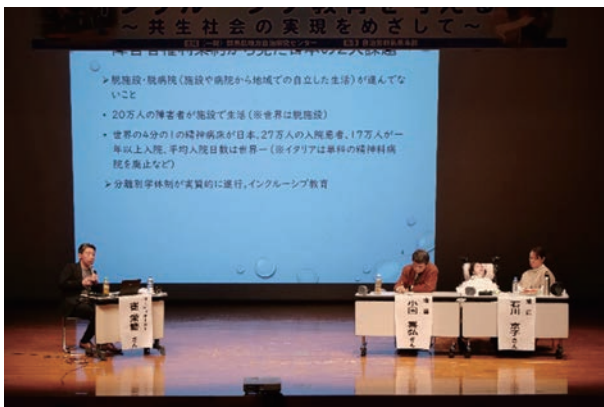
崔 栄繁氏

パネリスト

小国 喜弘氏

パネリスト

石川 京子氏



【司会】 それでは、お時間となりましたので、「かきねのない共生社会を考える～インクルーシブ教育の未来と今と～」、ディスカッションを始めさせていただきますと思います。

初めに、登壇者を御紹介いたします。

パネリストとしまして、前段に御講演をいただきました小国様、石川様にも引き続き御参加いただきます。よろしくお願いいたします。(拍手)

また、コーディネーターとしまして、崔栄繁様にお願いいたします。

崔様は、群馬県在住、早稲田大学法学部卒業後、韓国のソウル大学大学院に留学。1999年にDPI権利擁護センターのスタッフ、障害者権利条約策定のための国連の特別委員会に日本障害フォーラム(JDF)のスタッフとして参加。重度障害者の介助者歴7年。現在は、DPI日本会議議長補佐として活躍しておられます。

それでは、崔様にマイクをお預けいたします。皆様、よろしくお願いいたします。(拍手)

【崔】 皆さん、こんにちは。皆さん、こんな晴れた休日によろこそお越しいただきました(笑)。ということで、せっかくお越しいただいたので、今日は、「かきねのない」とおっしゃいましたよね。なので、この会場も、段の上でも「かきねのない」感じでシンポジウムを進めていければなと思っていますので、少し眠たくなったらあくびとかしても構いませんし、立って深呼吸されても構いませんし、自由な感じで、ぜひ参加していただければなと思います。

はじめに私の団体の紹介をさせていただきますと思います。

DPIという団体で、「障害者インターナショナル」と日本語では訳しますけども、あまりそれを使わないで、DPIと言います。障害当事者を中心に活動しています。私は今のところは多分障害がない、分かりませんけどね。なので、当事者の活動をサポートするとか、一緒に運動していく、支えるみたいなスタンスでやってきています。

一応インターナショナルなんですよ。だから、さっきの国連とかいろいろやっているんですけども、ただ、インターナ

ショナルとはいえ、世界の本部から何か命令とか指令を受けて動くのではなくて、各国のDPIを自由に活動して、緩やかに連携している組織です。世界 120 に国内組織がある。公式的にはやっています。こんなに今はないですけども、活発に活動しているのは大体 50 ぐらいかな。50 ぐらいの国では国内組織が活発に活動している。

日本のDPIは、正式名称は、DPI日本会議といいます。有名な日本会議さんとは全く関係ございません。たまに電話かかってきますよ。「おたく、どういう活動をしているんですか」みたいなね。「多分違うと思います」と言っている切るわけですけども、先ほど小国さんから、養護学校義務化反対運動の話が出ていた。小国さんは今、もはや日本を代表するインクルーシブ教育の研究者みたいになっているんですけども、もともとは教育史ご専門なんですよ。なので、そういう歴史のことがお詳しいんですよ。当たり前だけど。(笑)

日本のDPIは 1986 年にできたんですが、その前にいろいろな団体があって、その結集体です。いくつかの主な団体が養護学校義務化の反対運動をしていた団体です。全障連とか、正式名称は、自分の団体でも忘れちゃったんですけども、あと、脳性麻痺者の青い芝の会とか。愛を否定するみたいな、そういう当時過激だと言われていた団体がDPIのDNAなんですよ。やっと今、時代が追いついてきたみたいな感覚で偉そうに言っていますけれども。

なので、その養護学校義務化反対運動だとか、あと、脱施設、そういう運動で、自治労さん、あと、教育の場面ですと、日教組さんか。日教組さんとはいろいろな場面で意見交換をさせていただいています。

今日は、全国 90 ですけども、群馬県にはうちの加盟団体が太田にあるんです。太田です。そこに上州Projectという自立生活センターがあって、障害当事者が中心になって、障害当事者のエンパワーだとか、あと、介助者派遣をして、地域生活を支えるという事業所、事業をやりながら活動している団体が全国 90 で、群馬には 1 つ。残念ながら、まだ 1 つですけどもという感じの団体で、私は今、活動しています。

先ほど小国さんにネタを取られたと思ったんですけど、ユネスコの話で、インクルーシブ教育の恩恵について議論することはみたいな話で、やっぱりこれを話すと、特別支援教育を一生懸命やっている方たちに反発を食らうことがあるんです。なぜ。小国さんの話で大分、価値みたいなところ、皆さんもすごいお分かりになったと思うんです。それは、じゃあ、今の特別支援教育をどうすればいいのかという話にもなっていくわけですけども、決して二項対立という感じって訳ではないとも私は思います。ただ、方向が、残念ながら、今の日本の教育制度、特別支援教育の制度というのはかなり方向性が間違っているということは確実に言えると思うんですね。

ここから少しずつ深めていきたいんですけども、小国さんの話でもしよっちゅう出てきたと思います。なぜインクルーシブ教育が必要なのかとか、世界がそういう方向で、今、いろいろな国ですごく試行錯誤しながらやっているのかということの理由の一つ、小国さんもおっしゃっていましたが、それは、最終的には学校を出た後の社会ですよ。いろいろな人がいるという。そこに慣れなきゃいけない。

学校はまず慣れの場だと、私はよく言っていますけれども、どんどん障害のある子

がいなくなったり、学校に通えない不登校の子どもが増えたり、そして、よく言うのが通常学級が痩せ細ってきているという言い方をするんです。行けない子どもがどんどん増えちゃっている。支援学校とかにどんどん行って、教室が足りなくなっているみたいな話で、またどんどん増えている。

ここは、私たち大人がもうぼちぼち本気で取り組んでいかなきゃいけないとこだなと私は本当に思っているんですね。今、石川さんの発表であったとおり、ああいう知果さんと一緒に育った子どもたちと、そうでない子どもたちというのは、大人になったら、やっぱり差が出てきちゃうと思うんですよね。ああ、あのとき経験したよなみたいな。小国さんも先生のくせに言っていたじゃないですか。学校って、先生との出会いというよりは、やっぱり子ども同士の出会いが後々自分たちの人生、ああ、あのとき、ああいうことがあったよなと思ひ出す。大体、友達とのいろいろなやり取りなんですよ。それが教育学の人たちが言う豊かな人生を歩む。ところが、今は全くそれが逆行しているんじゃないかというのが、さっき小国さんが熱く語っていたんですけど。

なので、私がよく言うのは、インクルーシブ教育自体が目的ではないということです。その後の社会をどうやって生きていくかということが大切です。これは障害者だけでない話だと思うんですよね。今、群馬県は、外国ルーツの方もどんどん増えているし、私は高崎に住んでいますけども、インドネシアの方ですかね。イスラムのこういう、女性でかぶっている方がすごい増えているし、高崎でも、コンビニでバイトしている方は大体外国の方が多い。そういう人たちと一緒に暮らしていく社会になってきているんですよね。

ここで、じゃあ、私はどういう教育を受けてきたというのが試されているんじゃないかなと思う。私たちの下の世代の人たちはもっと試されちゃう。世界の国々はどんどんインクルーシブな方向に向かって、それなりにやっているのに、逆行しているこの国はどうなるんだと、ちょっと心配なんですよ。皆さん、自治体の職員の方が多いと聞いていて、教育の方もいらっしゃるのかもしれませんが、何も、じゃあ、教育じゃなくて、何が日本は障害の分野で問題になっているかというのを紹介したいと思います。

小国さんから、国連から勧告が出たという話があったと思います。あれは私もジュネーブとか行ってきて、その活動をずっとやってきたんですけれども、日本政府を含めて日本に対して、障害者権利条約から見て、ここを直してくださいとか、こういうことを見直してくださいみたいな勧告がいっぱい出ています。93 ぐらい出たんですけれども、そのうちの 12 が強い要請という、強い言葉が使われているんです。「アージ」という言葉ですけれども、その強い要請、普通の勧告という言葉ではなくて、強い要請という言葉が使われているのが、この脱施設、脱病院という地域生活の部分と教育の部分なんですよ。国連の障害者権利委員会は、特に日本のこの 2 つの部分にすごい注目している。

ちょっと紹介しますと、障害者だけが住んでいる施設がありますね。入所施設というのは群馬県にもいっぱいあります。特に欧米というか、もう 1970 年代ぐらい、そういう施設入所で、施設生活はやめようという脱施設の運動というのはもう 40 年、50 年前からずっとされてきているんですよね。そういう流れの中で、国連の条約も、第 19 条では、地域での自立生活という権利を権利規定しています。

ところが、日本は、非常に残念な話ですけども、まだ 20 万人の人が施設に住んでいると。これは逆に施設がいい、悪いというよりは地域で暮らせないということなんです。また、なかなか地域移行というものが進んでない。群馬には、日本で唯一残っている国立のぞみの園と、高崎市にあるんですけども、今、その園長さんも私は知り合いになっていて、あれですけども、あそこは大分、入所者を減らしたわけですけども、全体的に言うと、まだまだ日本がいわゆる先進国と言われる国々から比較すると、すごい遅れている部分なんです。

もう一つは精神科病院です。これはあまり知られていないんですけど、世界の 4 分の 1 の精神科のベッドが日本にあるんですよ。33 万所ぐらいあるんですけど、入院患者、27 万人いて、17 万人ぐらいが 1 年以上、入院しています。平均入院日数は 250 日、これは世界トップ、断トツトップ。それで、2018 年かな。調査では、50 年以上入院している人が 1,700 人いると。もはや、1 年以上入院している方の大体半分ぐらいは、私たちは 10 万人以上と言っていますけども、在宅で通えば、治療、入院の必要のない人たちだと言っています。でも、帰るところはもうなくなっちゃうんですね。こういう状況があるんです。

だから、教育の分野でも 1979 年からの分離別学体制と言いますけれども、障害者はあっち、それ以外はこっちみたいな社会に慣れちゃっている。私の生まれは神奈川県川崎市なんです。小学校、中学校も公立の学校、高校も公立の学校ですけども、やっぱり障害のある子はほとんどいなかったんですよ。学校にいないということが慣れちゃったんですよ。

すると、大人になっても、そういう学校に慣れちゃうと、お互いに、じゃあ、

共生社会で一緒に働きましょうと言っても無理なんです。お互いに慣れていないから。さっき、石川さんのお母さんが、通常の学校は怖いとおっしゃっているお母さんがいると。当然じゃないですか。慣れていないわけだから。お互い慣れていないわけですからね。という問題があるので、特に、今日、最初、黒澤さんがおっしゃっていた、それは日本じゃまだ無理だよってということではなくて、自分たちで、今日、何か少しでも、何でもいいですよ。少しでもインクルーシブ的なところに向けて何かできないかなということを、ぜひ皆さんには取り組んでいただきたいなと思っています。

それで、学校も、いろいろあるんですけども、これは私が最近気に入っている絵ですが、これは学校の先生の習字なんです。このクラスには、いわゆる発達障害というか、自閉の子が二、三人いるらしいんですよ。いわゆる支援が必要な子。この先生は、習字の、本来は「よもぎ」と、みんな書かせるわけですけども、「よ」と「も」と「ぎ」が入っていれば何でもいいよという課題にしたんです。すると、この「モップ」とか「よぞら」、「せいぎ」、「まぎわ」とか、あと、変な動詞で、「もむぞ」とかあるんですけども。(笑) これをやると、誰がうまい、下手と気にしなくなるんですよ。ああ、おまえ、「よぞら」を書いたの。俺は「よう」だよみたいな。何を書いたかという方向に、みんな神経がいて、序列をつけなくなるというような。これは実際、今、学校で先生が取り組んでやっているようなことなんですよ。これもインクルーシブ教育の一つの実践なんです。

こういう細かいことは日本でも結構あって、あと、せっかく今日、知果さんがいるので、同じ医ケアの必要な例を挙げれば、これは名古屋の人ですけども、

ハヤシキョウカさんといって、小学校からずっと通常級。名古屋市ですが、今、女子高生していますよ。でも、この人も、御覧のとおりと言っては変ですけど、発語できませんし、こうなると、もはや知的障害があるかどうかすら量れない。分からないじゃないですか。あるかないかもよく分からないけども、歩けない。発語できないので、顔の表情で、この子はこう考えている。

だけど、さっき小国さんの話で、ああ、このことだよなと思ったのが、キョウカさんの授業のシーンです。これは今、男の人が、これは先生ですけども、キョウカさんにつけられたというよりは、学年全体を見るけども、このキョウカさんのクラスを主にみますよみたいな先生が、こういう易しい、模造紙を使ったり、教材を作るんですよ。すると、上のほうの写真に出ていますけども、ついに立ち始めた、落ち着けない、ほかの子どもが寄っていくんです。こっちのほうは先生の話より分かりやすいんですよ。先生の話聞いて分かる子は、先生のほうを向いて勉強していて、これではちょっと分かりづらいけども、キョウカちゃん用にでかい、いろいろな絵を使ったりして、先生たちが工夫してやるのを、ほかの子どもたちが見に来て、すると、小国さんも多分、ヨーロッパとかアメリカではいろいろなデータがあると言っていたんですけども、これ、分からない子どもはこっちを見たら少し分かるじゃないですか。

この教育的な効果というか、ああ、このことだな。子どもたちが、こうやって自由にさせると、今度、教え合い出しやすいですよ。これがインクルーシブ教育の真髓かなというか、子どもたち同士が関わり始める。というので、今日はこころ辺の話をもうちょうとこう、皆さんが初めに何かこう、スッと入ってくるよう

な感じで何か共有できるといいなと思って、ちょっと急いで、前半のお二人の話に関係するところの資料をつくってみました。

評価も、先生がやる評価以外に通信簿があるじゃないですか。あれって別につけなくてもいいらしいんですけども、私の知っている先生は、「よくできました」と、「大変よくできました」と2つだけとか。だから、小学校はこれだけなんです。すると、あまり気にしなくなってきたりとか。さっき、小国さんが大切な話、石川さんとの話にも共通しているのは、安心して楽しく行ける。比較されないとか、安心。皆さんも職場で、皆さんの職場というのはあれですけども、やっぱり職場の中でのいろいろな評価があるでしょう。何か嫌じゃないですか。(笑)嫌じゃないですかと言ったらあれですけどね。評価というのはすごく難しいんですけども、特に日本の学校は、小国さんがおっしゃったように、学力ということですよ。



まず小国さんに聞きたいんですけども、日本全国で今、学テと僕たち言っている、全国学力、何ですか。調査……。

【小国】 全国学力・学習状況調査。

【崔】 そうですね。学テ、全国学テ言っていますけども、あれって何なんですか。あれの弊害は何ですか。

【小国】 結局、全国平均が出るわけですよ。各都道府県の平均が出て、各市の平均が出るんですよ。各学校の平均

も出るわけですね。そうしたときに各都道府県とか自治体で立てている教育振興基本計画の中に、学力の向上というのが上がっているんで、教育委員会の指導主事の方たちは各学校を回って、学力向上に努めろと、それは学テの点数を上げろという指導して回る。そういう自治体は非常に多いというふうに聞いているんですね。どうやって上げるかということになったときに、これはもうマジックみたいな話になっていまして、特別支援学級に在籍する子どもは学テの対象から外れるんですね。そうすると、目の前の子どもがもし点数が低い場合、特別支援学級に移ると。学テの平均点を算出する対象から外すことができる。そういう数字上のマジックがある。だけど、先生は別に排除しようと思ってやっているのではないと思うんですね。そうではなくて、やっぱりできることがいいことだと思われていると、その子にとって合うところで学ぶことがいいことだということになってしまう。すると、実は排除しているという意識は全くなく、この子のためということの中で、社会的に見れば排除が行われる。そういうことが今、全国的に起きているんだと。

【崔】 あれですね。だから、平均点も0.5点とか1点の争いになっている。

【小国】 そうです。もう0.1点、例えば市の平均より高いと、その学校の校長先生はすごい喜んでいらっしゃいますし、0.1点低ければ、もう大騒ぎ。この学校は本当に問題なんだというふうにおっしゃるような校長はすごく多いですね。そういうようなプレッシャーの中で仕事をすることを余儀なくされているという点で教育行政の問題があるというふうに思います。

【崔】 ありがとうございます。私と小国さんは実は同い年ですけども、昭和の

世代で、あのときも受験とかいろいろあったけど、もうちょっとおおかだだった気もしますよね。私、ちょっとびっくりしているんですけども、そういう中で、先生も子どもも親御さんもみんな疲れちゃっているんじゃないかなと思っています。これは社会全体がそうなっちゃっているんじゃないかな、評価とか、あとは先ほど、小国さん、自立という話が出てきましたけども、自立だとか、あと、自己決定、自己選択というか、変な意味ですごい強調されちゃっていて、本当はみんな、そんな自分で全部決めている人間は一人もいやしないのにと思うんですけども。

あと、障害の分野、これはぜひ知っていただきたいのは、さっき小国さんがチラッとおっしゃっていた自立という、英語で言うとインディペンデント、これは独立とか自立ですけども、障害の分野では、特に障害者権利条約ですね。自分で、どこで誰とどのように住むか決めることなんです。そのために必要な支援を受けながらということなので、自分で、一人で御飯を食べるとか、一人で着替えをするとか、一人でお金をちゃんと稼いでくるという自立とは全く違う自立なんです。なので、ここは少し頭の中に入れておいていただくと、実は特別支援教育の中でいろいろな障害を克服し、とか、自立がいっぱい出てきてしまっていて、これが昔ながらの自立。で、障害者はできない人たちだみたいな、教育体制の中でそういうふうな位置づけられてしまっているというのがあるという現実。そこにもう社会全体が慣れてしまっている。

そんな中で、石川ママさん、何か。多分、群馬県だと、地域の学校に、今、国連でも、重度、軽度という言葉すら使わなくなっているんですけども、重い障害があって、地域の学校では多分初めてで

しょう。

【石川】 多分。

【崔】 最初怖かったんですか。

【石川】 いや、私の場合は怖くはないですよ。ただ、自分がやったことないことをやっているの、変なふうに面白いのかな。一回、新聞に出たときに、やっぱり隣の学校に医療的ケア児の知果のお友達が行くというので、じゃあ、私も挑戦するというのも裏にあった、裏というか、一緒にあったんだけど、そちらは知的がしっかりしていたんですよ。だから、行くというふうに普通に思ったのかな。でも、知的的に分からないのに、ただ医療ケアがあって行けたから、じゃあ、うちも行けるみたいな軽い感じもあったから、あれ、間違っちゃったかなと思ったんですよ。そのときにやっぱり、「えっ」と一瞬思ったときもあったけど、もうそんなの忘れちゃうぐらい普通にスムーズに行けているところもあるかな。



【崔】 英語の時間が楽しいとさっき言っていましたね。

【石川】 すごい楽しい。

【崔】 あなたじゃなくてね。知果さんが。(笑)

【石川】 そう、知果が。(笑) 英語の時間が楽しいんだよね。

【崔】 笑ってる。

【石川】 アメリカの人かな。英語の先生と、あと、日本の学校の先生がいるんだけど、日本の先生がびっくりするほど

ハイテンションで。(笑)

【崔】 アメリカ人じゃなくて、日本人のほうが。

【石川】 日本の先生のテンションのほうが面白いと言って、多分そういう、何かちょっとずれた笑いが好きなんですよ、この子。それが面白いんだと。だよね。そうです。

【崔】 これは小国さんの話と共通しています。楽しむというか。楽しいということは安心なんです。安心して行けるじゃないですか。楽しいということと安心、安全はつながっていると、よく私の知り合いの先生は言っていますね。だから、楽しければ学校いいじゃんと言う先生も結構、最近いますけど。だから、みんな楽しいと安心できる。先生も楽しければ、先生も安心して授業できるみたいな。その楽しいというのが今の日本の学校には決定的に欠けているのかなと。日本の学校というか、友達の関係も希薄になってきちゃっているみたいですし、休み時間もあまりない。あるけど、みんな遊ばないですよ。昔は何かドッジボールしたり、10分、15分の休みでも外でワッと遊ぶ。今、世の中、移動したりとか、結構みんな忙しくなっているかな。学校見学すると。そこら辺、どうなんですか。小国校長先生(笑)。

【小国】 休み時間は、遊ぶ時間ではなくて、授業と授業との間の休憩時間みたいな感じになってしまっています。この20年間の教育改革の中でそういう慣習をつくってきたように思います。つまり、授業ができない教師は力不足で、指導の対象にするみたいなことを含めて、2000年の前半ぐらいからすごく教師に対して規制をかけてきました。それから、教育基本法改正では、規律ある学習という項目が、新しい教育基本法の中に入ることによって、教室の規律が保たれているか

どうかということ自体がチェックの対象になってきました。学校に行くと、教室には、「聞き方名人」、「話し方名人」とか、「背筋はピン」とか、「足は床にべったんこ」とか、いろいろな言葉で姿勢すら、理想型が子どもたちに提示されている。何かそういうことがいろいろな形で行われてきています。

そういう中で、先生にとっても、それから、子どもたちにとっても非常に窮屈な環境が、これはある意味、行政発で実現されてきた。先日、東京都の校長に聞いた話ですが、校長が何か言ったら、学級担任の先生は、「はい」と「イエス」と「喜んで」しか言えないと。つまり、「ノー」と言うことは無いと言うんですよ。だから、職員会議も、そういう意味では、1999 年ぐらいだったと思いますけど、これは議決機関ではなくて、校長の学校運営の賛助機関というか、補助機関にすぎないという位置づけが明確にされていくわけですよ。職員会議というのは長らく戦後の民主主義を学校の中につくる一つの重要な場として位置づけられてきたが、いわば職場の民主主義が奪われてきたのがこの 20 年でした。

やっぱり一人一人、自分らしく働いている教員がいるからこそ、生徒たちも一人一人が自分らしく生活ができるんだなというのは私自身が学校にいと学んでいるところがあって、そういう意味で、そういうものが本来は人間の当たり前の環境としてあるはずなのに、この 20 年間、一生懸命みんなで寄ってたかって学校を潰してきたという、率直に言うと、そういう反省に立たないといけないのかなという気がしているところです。

【崔】 それはゆとり教育が失敗だとか何とかと言われた 2000 年ぐらいですか。その流れですかね。

【小国】 一つは学力重視という流れが

あったと思いますし、それから、政治の言うがままに学校を動かしていこうという改革が行われてきました。この改革は実は今、大学のほうにも来ていまして、教授会を無力化して、経営層を外部から入れて、そこの指示の下に大学を運営していこうというような流れがあります。恐らく今後は大学の言論の自由とかが潰されていく可能性があるんだろうなというのを、今、非常に危惧しているということです。

【崔】 こういう状況の中で、先ほども 10 年前に比べると、子どもの数はどんどん減っているのに、支援級の籍の子、支援学校の籍の子はどんどん増えている。10 年前に比べると支援級の籍の子は 2.3 倍から 4 倍増えているんですね。子どもの数は減っているのに。支援学校は 1.3 倍ぐらいですか、増えていて、まだ足りない、足りないといって、どんどんつくっている状況だと。

私、冗談で、昔、国滅びて山河ありみたいなのがあるじゃないですか。中国の。何か滅びて、どこが変わるみたいな。何かちょっとおかしいなというのをやっぱ社会全体でやっていかないと、これは本当にまずいんじゃないかなと危機感を持つ時期なんじゃないかなといつも思うんですね。

その中で、石川さんたちのやっている、今度、次は中学校ですか。どうするんですか。

【石川】 中学校ですか。普通に地域に行くんですけど、この間、高崎の議員さんにばったりお会いして、「中学校、どうするの?」と言われたときに、「普通に行くつもりで」と言ったんだけど、「教育委員会とか学校にお話しした?」と言われたから、「えっ、してないですけど」と思って。それで慌てて、先週の月曜日に、校長先生と教頭先生がいたので、「すみませ

ん、中学校に行くのにまだ連絡してなくて」と。ほかの子たちはもうどこの学校に行くと連絡している時期らしいんですよ。9月と12月かな。どこか学校から、この子はこっちに行きますというのを、どの子も全員何かあるらしいんだけど、「私、言っていないんですけど」、「えっ、普通に行くよね」と校長先生に言われて、「行きます」と言って、「びっくりした、どこか違うところに越すのかと思った」と言われたんですよ。それがうれしくて。全然行きます。

P T Aもやっているから、地域の中学校に行くことがあるんです。そうしたら、そこの地域の校長先生が、知果と一緒に行ったんですよ。そうしたら、「エレベーターがあるから見ていく？ 来年乗るっしょ」みたいな感じなんですよ。だから、「今日、P T Aで来ているので、今日はちょっと」みたいな感じでというぐらい、地域に受け入れてもらっているなとそのときに思ったから。私は、そういう意味では、今、ロリポップにいろいろな、「学校、どうしよう」とか、「保育園に行けない」とかいろいろな悩みが来るんだけど、何だろうな。誰々に言って、そうすればこうなるからという流れじゃなくて、ポイントがあるんですよ。大人が話を難しくしちゃうんですよ。じゃなくて、行きたいから、「こういうふうに行きたいのでどうですか」と言って、もっと、行けるか行けないかじゃなくて、行くにはどうしたらいいですか、これですよ。だったら、自分たちもこういうふうにしますと、そういう流れを先輩ぶって伝えたいんですけど。そういう意味では、そういうチャンスが欲しいですね。

【崔】 皆さん、どうですかね。障害のある子どもの親と障害のある子どもは、大体6歳とか12歳で悩むんです。どこ行くかと。障害のない子どもとか、障害の

ない子どもの親は別にそんな悩まないですよね。私立に行くとか、公立か私立かと、そういう感じのあれで。障害のある子どもと障害のある子どもを持つ親だけは悩まなきゃいけないんですよ。これがまた、みんな大変な思いをしていて、石川さんもつらいときにはよく泣いたりしますよね。たまに泣いたりとかするんですけども、全国のお母さん、特に父親があまり出てこないというのは、これまた問題ですけれども。

本当に全国の親御さんたちが、例えば通常学級に行きたいと言っても大体やんわりと断られちゃう。もう大体そうなんですよ。何かのいろいろな運動があったり、例えば自治労さんとかそういう運動がバックしてくれる仲間がいると、結構行けたりもするんですけども、そうじゃないところは大体、やんわりと通常の学校、学級には行けない。公立では行ってはいけなくなっているんですけど、変わったんですけども、現実的には行けない状況があって、こっちのほうがいいですよ、支援がある、こっちのほうがいいですよというふうにして、何となく断られちゃうというのが現状なんです。

なので、それはおかしいでしょうというのが先ほどお二人からのずっと話と、世界の流れでもあるわけですね。だから、原則は、通いたい子どもは全部、通常学級、原則にしてしまう。特別な、ちょっと必要だなと、支援学校、学級が選ぶのであれば、そこで選ぶようにすればいい。韓国はそうですけど、受験戦争が厳しい、韓国もそう。なので、日本だって、少なくともそこまでは行かなきゃいけないんじゃないかな。

だから、石川さんが、知果が中学に行ったとき、何も考えなくても普通に、何となく、じゃあ、地域の中学だなみたいな流れになってほしいわけですよ。もっ

と具体的に何かありますか？

【石川】 具体的に何かありますか？
ちょっと待って。具体的にと言うと？

【崔】 例えば、いや、私も別にただ聞いただけですけども。今、私の団体などは、原則は通常の学級に行けるようにしましょうという運動をずっとしているんですよ。それは法律、ちょっと変えるかな。変えなきゃいけない部分もあるんですけども、今でもできることは結構ある。自治体で就学通知を市町村から出すようにするとか、できることはいっぱいあるんです。なので、そういう仕組みの部分も少し一緒に何かできないかなとずっと思っています。



【石川】 そうですよ。何だろうな。まずもってお母さんたちが、さっき崔さんが言った、地域の学校に行きたいと言って相談に行く市役所で、市役所とお母さんの間でもう断られちゃう。例えば小学校だったら、お母さんたちも働く方が多いので、「放課後、どうしよう」といったときに、特別支援学校だったら、さっき言った学童みたいなところの放課後等デイサービスの職員さんが学校にお迎えに行ってくれるんでしょうね。そうすれば、お母さんたち、夕方までお仕事ができる。だけど、特別支援学校に行かない、地域の学校に行く場合はルートにいないので、「行けないですよ」と言われて、じゃあ、お母さん、お仕事できなくなっちゃうから、「私、特別支援学校にしたんです」と

いうお話を、3件ありますね。ちょっと前からだけど。じゃなくて、移動の問題だったら、別に移動支援ですればいいのにと、そこがもう行政とお母さんで終わっちゃっていて、結局、もやもやしたところを私たちが聞いて、でも、特別支援学校で楽しそうにはやっています。だから、そっちが間違えでもないんですけど、何かもったいないなと思って。

【崔】 そうなんです。だから、分離教育を前提にいろいろなものがつくられてしまっているんですよ。通常学級にいる、障害のない子どもは大体、学童という、学童と呼ばれる通所、学童というところに行くところが多いと思うんですね。学童が障害がある子どもを想定しないので、障害のある子どもが放課後、行き場がなくなっちゃうわけですよ。だから、障害のある子どもが行ける、先ほど言った、放デイ、放課後等デイサービスというのが全国ですごい増えている。そこは送迎がつくんです。送迎加算があって、事業でちゃんとつくんですよ。なので、通常の学校にいる障害というのはなかなか想定されていないから、支援学校が当然なので、そっちに手厚くしましょうよみたいな、だから何となくみんなそっちに流れていく状況があって、国連のほうから見ると、これ、どうなっているの？ という。さっき言った、どんどん在籍する子どもが、特別という名前がつくところの在籍がどんどん増えているということの、何ていうかな。社会全体がそういう構造をつくってしまっているみたいのところなんですよ。

【石川】 それで、それってそのままじゃ嫌だということで、今、私も地域の学校に行っているから、地域の仲間も増えてきていて、その中で、今度新しくやろうとしていることが1個あるんですけど、地域の公民館をオープンにするんです。

それで、今日、一緒に企画しているお友達も来ているんですけど。言うね。「言うね」とか言って。(笑) 公民館を放課後、開放する。そこに、私たちが小学校のときと同じで、普通に帰る。そこでまちのおばちゃんとかおじちゃん、おじいちゃん、おばあちゃんが一緒にいたりして、フォローすればいい。そうすれば、こういう子だって、帰るときに一緒に帰ってもらって、そこ、危ないとかいろいろあると思うんですけど、それはさておいて、一緒に帰れば、そこでみんなで、お父さんやお母さんがお仕事から帰ってくるまで公民館で見れると。それを学童とか放デイにしちゃうから、人数が、医療的ケアがと言われちゃうわけだから、もっと敷居と言うんですかね。もっと昔に戻ったらいいのになとすごく思っているんですけど。

あとは、ごめんなさい。もう一個、どうしてもインクルーシブと考えると、フルインクルーシブと言って、地域の学校に行っても、特別支援学級じゃなくて、普通のクラスに入れるべきだという話がすごく多い。確かにそれは理想なんだけど、今、実際、知果が行っているのは普通学校のゆうあいという特別支援学級のほうなんです。でも、この時代、この群馬県でと考えると、私は十分だと思っていて、逆に、金古南小は結構、知果のところにもいろいろな子が入ってくるんです。さっきも言った、お父さんとお母さんと一緒に暮らせない子だったりとかがいて、もう二十何人いて、ゆうあいクラスが5つぐらい分かれているんですよ。でも、そこをみんなが行ったり来たりしていて、逆にそこに普通の子たちが来ればいいんじゃないかなと。

だから、つくり方が反対の発想で、支援学級なんだけど、そっちに人数がいれば、そのクラスというか、そのシステム

は当たり前にも子どもたちも保護者も思うから、それは新しいなと思っていて。今、ミシンボランティアと言って、学校に、ミシンのボランティアに行くんですけど、その特別支援学級のミシンのボランティア、私じゃないと行けないんですよ。それはなぜかという、やっぱり発達の子たち、自閉症の子たちが、誰でもいいわけじゃないんですって。毎日通っている知果ちゃんのママだから教えてもらえるというふうに先生もちゃんと選んでくれているんですね。だから、質のいい特別支援学級だったら、その質がいいというのは、通常級の子も出入りしているんですね。そういうところの垣根をどんどん取っていけば、新しい逆パターンのシステムもあってもいいのかな。群馬なら何かできそうな気がするなとちょっと思ったりはしています。

【崔】 さあ、ちょっとフルインクルージョン、このインクルーシブ教育と言ったときの一つの大きなキーワードがフルインクルージョンとか、インクルーシブ教育、何？ 違いは何？ みたいなところで。今、石川知果さんは支援学級籍だということなんですね。さっきもちょっと出しましたけども、私たちはやっぱり通常の学級を変えなきゃいけないということをずっと言っていて、これはみんなが疲れているし、そんな仲間であって競争させたいしょうがないじゃんみたいなことなので、もし、もう5つもなかよし、ゆう…、何だっけ？ クラスがあれば…。

【石川】 ゆうあい。

【崔】 ゆうあい。間違えてどうするんだ。(笑) 通常級にしちゃえばいいじゃんくらいの話ですよ。教え方とか、今の私たちが受けてきた教育を前提にしないというか。と思うんですけど、ここは小国さんが専門。どうですかね。

【小国】 現行法で言うと、通常学級は

35 人とか 40 人に 1 人の教師が配置される。特別支援学級というのは、8 人、子どもがいたら、障害種別ごとに 1 学級ができて、そこに 1 人、教師が配置される。今でも、実は特別支援教育が増え過ぎることによって教員不足が起きているという話がある状況の中で、現実的にこれ以上増やせるのかという、コストも含めて問題があるのと、やっぱり特別支援学級は、特別支援学校用の学習指導要領に準拠することになっていて、普通級は何用とかなない学習指導要領に準拠することになっているので、そこの垣根は実は非常に大きいところがあって、なかなかそのところを、垣根を取るというのは多分、その制度的な問題をどういうふうに乗り越えていくのかという話と絡んでいるような気がします。

【崔】 ほかの国の例を挙げますと、一番比較しやすいのは、私は韓国だと思うんです。文化的にも受験のマインドとか競争のマインドとか似ているんですけども、韓国は、今もう大体、小学校、中学校は、子どもの数は 1 クラス 30 人以上いません。ソウル市の学校、中学校でも、私の知り合いの子どもが通っている学校は二十五、六人。「先生はどうやってつけているの?」と言ったら、日本みたいな義務定数法のようなものがない。大体二十五、六人ぐらいになったら先生をつけていくみたいな。

ほかの国もそういう国は多いんですよ。箱にボンとつけちゃう制度なので、だから、支援学級じゃないと、支援学級籍じゃないと、さっき小国さんが言ったように先生がつけられない。8 人集めて、支援学級籍にしないと先生が集められない事情というのが制度的にあるので、これがなかなか壁が厚いということ。ただ、これを大阪のほうとか。さっきは通常級籍ですけども、大阪では、支援学級籍にして、

大体全ての時間を通常の学級にいて、支援学級の先生として配置された先生が各教室を見回ったりするという取組を、特にこれは 70 年代、80 年代から、それこそ組合も頑張ってきてきたという実践があることはある。これは我々、全面交流とか原学級保障と言っていますけれども、特に関西、あるいは一部、神奈川県でもやっていました。

そういうのもあるんですけども、この前、文科省さんは、それは全部、そっちはあかんみたいなことを言われちゃったので、現場だけで悩んだり、現場の母親とか先生だけで悩んで解決するんじゃないって、やっぱり大きな仕組みを少しずついじっていかないと、それは結構大変な話だと思うんですよ。ずっと自分たちでやっていかなきゃいけないというよりは、国の大きな制度、政策をきちんと変えるところは変えていくということが必要なんじゃないかなと思います。

石川さん、どうやったら一番楽かな。例えば、知果さん、英語が楽しいと。さっき、ハヤシキョウカちゃんのあれが出ていましたけども、みんなにすごい影響を与えているわけです。本人も多分いろいろな刺激を受けながらね。どうしたら、通常級でもいいやと思えるんですか。全部言ってください。

【石川】 通常級でいいなと思えるのは、やっぱり友達と絡んでいる時間が多ければ、それはもうお願いできちゃうなと思うんですよ。何て言ったらいいのかな。意外とよく新聞とかに載っているインクルーシブというか、通常学校に行きましたみたいな感じのを見ると、結構みんなが集まって、いい写真とか撮るんだけど、そういうシーンは本当はあまりなくて、それが私は好きなんです。普通なんです。普通に知果がいて、「ああ、知果ちゃん」という騒ぎはあまりなくて、普通に

もう、「はい」みたいな感じの、そういう空気感がすごく好きだから、知果の存在をちゃんと子どもたちが、わざとらしくなく、ここに知果がいても、A君がいても、B君がいても、同じような感じの距離感になっているというのがすごくいいなと思っている。そうならいいなと思って。

【崔】 どうですか。小国さんもいろいろな全国の学校を見てきていて、今の話はどうですか。



【小国】 今の話を伺っていて、本当に共感するのは、子どもの権利条例をやはり学校の中にきちんと入れていくということはすごく大事なことで、遊ぶ権利とか休息する権利というのは、きちんと子どもの権利条約の中には入っているわけですよね。こども基本法には、子どもの権利条例を遵守した形で日本の社会をつくっていくということが規定されているので、それがやっぱり学校に入っていないというのが変な話です。それが入っていくと、今おっしゃったような話は、例えば、もう少し休み時間を増やすような形で、1日の授業、時間割を組むとかそういうようなことは幾らでも学校の中の工夫として、これは学校のカリキュラム編成権の問題なので、学校の中での改革としてできる話なんですよ。

そういう取り組みがなぜ起こらないかということ、教育委員会から学力向上施策に反しているのではないかと思われるん

じゃないかと校長が懸念するといったことがあります。校長は60歳から65歳まで再任用される人とされない人とがいる中で、再任用されないんじゃないかという恐怖心の中で、ある意味、独自性が出せなくなっている。カリキュラム編成権は学校にあるんだけど、それが行使できないような環境をつくられているということが非常に大きな問題だと思うんですよ。

発達障害がずっと増えてきたという崔さんの話は、90年代以降の話です。労働規制緩和の中で、ある意味、日本人の雇用環境が脅かされてきた歴史でもある。そういうことの中で発達障害というのが増えてきました。

もう一方で、実は会社の中の働き心地というのが、OECDの順位でとってもしか下から2番目ぐらいで、昔は日本人というのは会社にいるのが非常に楽しみだったのに、今や会社にいるのが苦痛だと感じる日本人が多いような労働環境に変わってきました。それから、大学の世界もそうですが、正規雇用と非正規雇用との間の格差というのが、信じられないぐらい開いてしまっている。実はこういう問題と発達障害増加の問題はリンクしているんだと思うんです。

もう1個だけ足させていただくと、やっぱり世界の障害児教育の研究を見ると、障害児教育というのは人材の再配分の装置になっているという批判があります。だから、下層労働力の供給源として障害児教育が機能してきたというふうに書いてある研究物は結構ある。日本はやはり人材の再配分の装置として学校を制度化させてきたという、すごい強い歴史があって、その中でこの問題が起きているということなので、まさに皆様が取り組まれている労働問題と、実は、学校での見えにくい排除の問題は一直線につ

ながっているという側面があるんじゃないかというところなんです。

【崔】 だからというわけでもないけど、先ほどこから楽しい学校をとという動きが、特にいろいろな取組をしている先生から言われる。特に楽しければいいと言う人が増え、最近よく聞くなと思っていいんですけども、同じですね。職場が苦しい、学校が苦しい。同じですよ。同じことでね。どうすればいいんですかね。

いや、ここはもう、せっかく皆さん、晴れた日にこういう。ちょっと電気を。せっかくなので、何か言いたいこととか、俺、私に言わせろよと、好きな感じで言っていたいていいんですけども。質問でもいいですし、自分がこういうことあって、こういうのはどう考えればいいんだでもいいですし、今日、知果さんの、ママ、お友達、お仲間さんもいらっしゃるようですし。せっかくなので、聞くだけではつまらないと思うので、ざっくばらんな感じでやり取りできればなと思っているんですが、いかがでしょうか。どうぞ。名前も言ってください。



【インダ】 群馬県職労のインダと申します。今日はありがとうございます。特に知果ちゃん、石川さんと知果ちゃんの動画とか、すごく心温まりまして、まだまだ日本も捨てたもんじゃないなと思っています。ありがとうございます。

せっかくなので、早速、私がふだん思っていることとか、今日聞いて感じたとか

とか、少し話したいと思います。

まず、学校の状態を小国先生から御紹介いただきましたが、私が個人的に思っているのは、やっぱり今の学校の状態というのは、結局、社会が求めているからそういうことになっているんじゃないかなと。ということは、学校だけ見ても駄目なので、じゃあ、我々の考え方をもう既に決めないと。点数とか評価云々とありましたけど、今もう社会がそういう評価で動いてしまっているの、そうすると、それが必然的に学校の教育とか、そちらに反映されているのではないかなと。

私が小学校の頃、先ほど言いましたように、授業中でもどうやって遊ぶかみたいな。メールじゃないけど、メモのやり取りしたとか、授業中、どうやってサボろうかみたいなのを考えていた。でも、こうやって何とか公務員でずっとやっていきますから、特にそういうのは学力とかそういうのはあまり関係ないんじゃないかなという感じはしています。

それとあと、差別化じゃないけど、評価に云々とされているということは、私が思うに、さっき自立とかありましたけど、存在意義を自分で感じられない人が増えているんじゃないかなと。知果さんを見て思いましたけど、普通の子からいうと、いろいろなことができないわけじゃないですか。でも、あれを見ていて、社会の中に、ほかに与える影響、ほかの子どもたちとかに与える影響というのは私なんかより全然大きい。このままずっと育てば、もっと社会の中に、今日のこういう考え方がもっと広まるかもしれない。それは私なんかじゃ全然できないことなので、そういうところに知果ちゃんは、存在意義とか、今日来た中の、私なんかも、ああ、もっと私は、我々も頑張らなきゃなと思わせてくれるという、そういうと

ころはすごいなと思います。

今日、あと、そんなにないんですけども、もしこの後、残りの時間で、先ほど石川さんから、中学校に行くにはどうしたらいいか。なぜ行けないのかじゃなくて、行くにはどうしたらいいかというのがありましたので、もし許されるならば、少しそんな。じゃあ、これをもっと我々が求めるものにするにはどうしたらいいかみたいなことをちょっと、ディスカッションみたいなものをしてくれるとありがたいなと思います。

すみません。長くなりました。以上です。

【崔】 ありがとうございます。皆さん、拍手、お願いします。(拍手)

社会が、学校をそうさせるのだと。評価。できない話になってきちゃうんですけど、私も高校のときに、数学、代数か何か忘れてしまいましたけど、0点を取って、同じ試験で、同じ試験で追試して20点だったんですよ。それでも10段階で4をもらえたというね。いや、それでも一応卒業できましたからね。いや、すみません。そういう話をするわけじゃなかったんですけども。(笑)

じゃあ、もう何人か、いろいろなコメントなりいただいて、知果さんの中学生活、どうするかみたいな話をする楽しいかもしれませんね。

ほかにいらっしゃるでしょうか。何でもいいです。せっかく。じゃあ、どうぞ。

【モギ】 貴重な機会をいただきまして、ありがとうございます。前橋市に住んでいますモギと申します。2人の、小学校4年生と2年生の女の子の父親で、私の父親は下半身不随で、障害者です。いろいろお話を聞かせていただいて、誰のための教育なのかなというのが、正直、頭に浮かんできた感じは思いました。先ほど市のやり取りの中で、できること、多分皆さん、先生も含めて一生懸命働いて

いるんだと思うんですよ。自分ができることを精いっぱい伝えているんだと思うんですけど、それがうまくひもづいていないんだなというふうに思いました。

私は今年も、今年もというか、コロナ前と今年、沖縄に父親と一緒にいったんですけど、びっくりするぐらい飛行機の移動は大変でした。いろいろと配慮して、何とか行ってきたという思いはあります。ですけども、もう2024年です。だけど、現実はこの感じですよ。どうすれば、社会全体、学校教育なのか、社会の、先ほど質問者の方からお話があったとおり、誰のための社会なのか、誰のために学ぶのか、学ばされるのかというところは、みんながどうやれば思いをはせることができるんだろうなとふと思いました。

そんな感じの質問というか、あれなんですけど、いいですか。お願いします。

【崔】 ありがとうございます。これは誰のための教育か、非常に大切な問いだと思うんですよ。さっき、社会が何を求めているかというところで、誰のための教育かみたいになってきて、気がついたら評価されて、区別されて、そして、人の評価に不安になりながら、職場なり、学校なり、同じ構造にあるみたいな話だと思うんですね。うちはNPOでラッキーだったなくらいに思いますけどもね。なかなかいいと思いますね。

ちょっとだけ私のほうから。さっきの車椅子の移動をされたというところで、やっぱりインクルージョンが進んでいる国は、車椅子に乗っていても人はジロジロ見ないですけども、ちゃんと声かけとか普通に、介助者じゃなくて、その人にやったり、態度が全然違うんですよ。イタリアでもそうだし、行くと全然違いますよ。視線とか目線が全く違って、先ほど石川さんが言っていたけど、みんな普通なんです。だから、「これ、してほしい」

と言うと、大体何となくこう、親切心とかじゃなくて、普通にシュッとやってくれたりとか、仕組みもみんなが使いやすいようになっていたりとか、結構あるんですよね。

何かまだ特別な存在、特別扱い、特別な何かこう。私がよく言うのは、違う世界の人みたいなことがやっぱりまだ強いんじゃないかなと。それはやっぱり分離教育がもたらしてきたものじゃないかなと私は思うんですけども。

では、時間も少なくなってきた、知果さん、今、お二人の方から話が出ました。知果さんの充実した中学校生活を送っていくため、あるいは、知果さんに続くというか、仲間というか、続く人たちが地域の学校に行きたいと言ったら行けるようにするにはどうすればいいかなというのを、まずはトップバッターで。

【石川】 分かりました。

まず、中学校に入ったら、視線入力と言って、この間、特別支援学校の先生が、県立の先生が高崎市立の学校に来て、視線入力というのをさせてもらったんです。それで、知果の目がキョロキョロと動くと、それが絵になるんですね。私がピンクが好きだから、「ピンク、ピンク」と言ったら、偶然なんですけど、ピンクを選んで、ピンクでぐわーっと書いてくれたんです。それなので、それを中学校に行ったらやりたいと。



さっき言った、地域でつながっている

仲間も美術部がいるので、美術部に入りたい。ママも美術部だったので美術部に入りたいと言って。それを校長先生に言ったら、校長先生が、もちろん美術部でやるのもいいんだけど、授業にそういうのを取り入れてもらうようにしたらいいんじゃないかと。地域の学校の校長先生から、さらっと出たことがすごくうれしくて、なるほど、中学校だと放課後がどんどん遅くなるから、支援だ、支援だとまた問題になっちゃうから、授業中にそういうのを入れるように、するように、どんどん進めていこうと言ったんですけど、やっぱり解決方法としたら、私がいつもぶれずに思っているのは、この子は10日で死んでしまうよと先生に言われた子が、頑張って今まで生きているから、だから、いつもそのことを思うんです。

命は限りがあるから、こういう重度の子はちょっとの風邪でもすぐこじらせて、お友達でも、お空に行っているお友達もロリポップの中には何人もいます。そう思ったときに、もう来年、再来年の話じゃ遅いんです。この子が地域の学校に行きたいと言ったら、それに関わる人が全力で、じゃあ、地域の学校に行くのならどうしよう。今度、地域の学校に行ったら、地域の学校で友達をつくって楽しみたいんだと言ったら、それに関わる先生でも誰でもいいんです。保健師さんでも誰でも、それこそ放課後等デイサービスの人も誰でもいいんです。そういう人たちが、じゃあ、楽しみたいならどうやって楽しめばいいんだろうと、そこからスタートすれば何の問題もなく、後から、ああ、お母さん、こういうシステムがあるから、それはこういうふうな手続を取ったよというふうに、後でプロの人が書類をつけてくれるような、そんなような感じで今やっているんです。

だから、後続くお母さんも、私がずっ

と泣いていた時期があったんだけど、みんなで言うんです。泣いて子育てしていたらもったいないと。その1年、2年、ずっと泣いているんですよ。それはすごくもったいないから、とにかく笑って子育てできるように、私たちも相談があったら、あの人につなげよう、あの人につなげようと、つなげたい人がいっぱいいるんです。そういう方につなげていきたいなと思っています。ただ、待ったなしです。

【崔】 待ったなしらしいので、皆さん、公務員の方もぜひ協力してください。障害があるからあっち行くということだけは、「行かなきゃいけないんじゃない？」とか「行ったほうがいいんじゃない？」というのではなくて、今日のテーマは、「インクルーシブ教育を考える」なので、皆さんが窓口とか、皆さんの仕事の中で何かできることをぜひ探していただきたいと思いますね。

こういうのが欲しいと。制度とか、さっき公民館を使うとか、今、制度が使えないから、そういう工夫というのは、ぜひ行政からも、支援というわけじゃないですけども、やっぱりサポートというのは欲しいなと思うんですけどね。

どうですかね。もし自分の地域で、公民館をちょっと使わせてよと来たら、皆さん、どうですかね。ちょっと難しいなとなるかもしれないけども。そういうことですよね。

【石川】 ちょっと難しいなと簡単に言うんですよ。難しいとなぜ簡単に言うんだろうと、いつもママたちと言っているんだけど、私たちは、難しいことを簡単にしようとしているから、そこが行政さんと私たちの発想が違うところなんですよね。だけど、意外と、さっきもそうだけど、いい意味で、ゆとりの人が助けてくれるんだなと。若い先生が、それに影響されたベテランさんが結構いるので、

そういう人たちが一緒になって、簡単に、「難しいな」と言う前に、「それ、いいじゃん」とまず言ってもらいたいんですよ。「それ、いいじゃん」と言うと、いいじゃんの方向に進んでいるような気がして、そのくらいの気持ちでやったほうが私は楽しく進むなと思うんですけど。

【崔】 これは知果さんの中学に行くだけの話じゃないんですけど、今、非常に大切なことをおっしゃってくれたと思うんですよ。聞いて、どうですか。いい話だと。これは職場で、今、何だっけ。難しいことを簡単にだっけ。

【石川】 いいこと言いました？

【崔】 いいこと言いました。それは私もいつも思っていることで、私の個人的な考えというか、あれなんですけど、よく、やっぱり難しいとすぐ言う人がいるんですよ。難しいと言うのは、本当に難しいんじゃないかと、やりたくないんだなという、やりたくない言い訳だと思っているので、だから、難しいとすぐ言う人はあまり信用しないことにしています。やる気がないなと。やりたくない言い訳、難しいことをやりたくない言い訳。もし本当に難しいのであれば、いいけども、この辺がまだ課題だよとか、この辺のあれがないと、ここはできないよと具体的に言うはずなんですけど、何も具体性がなくて難しいと言うのは、単純にやりたくないというのかなというのは、私はいつも、そういう人にはそういう目で見ているんですけど。

あともう一つは、やっぱり今日、知果さんがこれから充実したという。先ほど、10日で亡くなるということで、もう過去も未来もないわけじゃないですか。もう今しかないから、だから、今日、私、感動しちゃっているんですけど。やっぱり不安というのは未来を考えた不安なんです。後悔というのは過去を考えると後

悔なので、今しかない、後悔も不安も、そんなことをやっている暇はないというところなので、私が何かできるというのはすぐすぐ分からないんですけど、ぜひその姿勢でというか、その考えでやっていってもらえば、後に続く人とか、周りの人ももっと、さっき言ったように影響を受けて、障害だけじゃなくて、もっと前向きな気持ちを持ってもらえるんじゃないかなと思いますので、私は直接、支援というのはあまりできないかもしれないですけど、心の中では応援していますので、頑張ってください。

皆さん、今日、やばいところに来ちゃったとか思っていますか。大丈夫ですか。とてもいい話だと私は思っているんですけども。簡単に難しいと言うなど。これは国連の用語というか、法律の用語では建設的対話ということが今最近、差別解消とかいろいろなところで使われていますけども、まずはできることから考えようよということだと、今そういう話だったと思うんですね。

じゃあ、最後に、誰のための教育かというのは難しいあれが出て、これは本当に、話を聞くと、本当に誰のための教育なのかということがだんだん分からなくなってきたんですけども、これは小国さん、どうですか。

【小国】 文部科学省の文書を見ると、例えば共生社会の定義自体を見ると仰天します。社会のために役に立つような人材になっていくということが共生社会をつくるための教育に必要なこととして定義になっているんです。だから、「社会に役に立たない人材」というのが想定されていて、「社会に役に立つ人材」になるようにという訳の分からない理屈が書かれています。「これが本当に共生なの？」というような形の。

それをどういうふうにして、人間への尊

厳を基本とした共生へと組み替えていくのかが問われています。顔の見える関係の中で、そういった問題を考えていくということが大事なんだというのが一つ今日出た話だと思います。

あと、ちょっとだけ足させていただくと、我々が改めて今日感じたのは、様々な形で分断されているんだというふうに思いました。日曜日のこの時間にわざわざ来てくださった皆様というのは、多分すごく意識の高い方たちだと思うんですけど、それでも、もしかしたらインクルーシブ教育の問題と御自身の職場の、ある意味、働きづらさの問題がリンクしているということをどこまで自覚されていたかということ、自覚されていた方もいらっしゃると思いますし、だけど、全員がそうでもなかったかもしれない。やっぱりインクルーシブ教育は子どもの問題としてお考えになっていた方もいらっしゃる。

そういう意味で、我々は差別が分断されていることによって見えづらくなっている。だから、学校現場でも声をもっと上げなきゃいけないんだけど、そういう問題と職場の労働の問題とがまさにリンクしているんだということを、どういうふうに可視化していくのかということが大きなテーマだなというふうに思いました。

最後の知果さんの話をされた石川さんの話を聞いていて思ったのは、依存すること、助けてと言うことが、ある意味、しっちゃいけな市民感覚があるわけですね。だから、自分で自分のことを処理しなきゃいけないみたいな。それから、周りにいる人たちもおせっかいをしっちゃいけなみたいな、それはおせっかいになってしまいうんじゃないかみたいな。だから、距離を取っておいたほうがいいという。ここでもやはり市民社会の中での分断が起

きているということが非常に問題なんだなというふうに改めて感じました。

だから、助けてと言える社会を身近な関係の中でどうつくっていくのか。それを広げて、自分が直接は知らない他者にも助けてと言いやすいような社会をどうつくっていくのかということがあると思います。

インクルーシブな、今日、崔さんがいろいろ見せていただいた、そういう教室の中で、うまくやれている教師が常に行っている言葉かけは、「どうしたの?」、「何か困っていることある?」、「私にできることは何?」という、この3つが非常に大事なんだとおっしゃる方、結構いらっしゃるんですね。恐らく皆様が自治体で働かれているときにそういう、「どうしたの?」とか「何か困っていることない?」、「私にできること、何かある?」という、ちょっと一歩寄り添うようなコミュニケーションが分断された社会の状況を少し変えていく可能性があるのかなというのを、最後にお話しさせていただきたいなと思いました。

【崔】 ありがとうございます。私は、虐待防止とか、障害者のあれでもよくやるんですけど、まさに今、頼みやすい職場とか、話しやすい職場は、ハラスメントや虐待は起きないんですよ。なので、これって学校も同じなんです。なので、まず我々DPIは東大と実は、小国さんのところと連携協定を結んでいまして、ここは制度もきちんと変えていこうというところで今、運動していますけれども、あとはやっぱりやれること、声を出していくこととか、例えば少しでも職場の環境を変えていくとか雰囲気を変えていくことで、先ほどおっしゃった、何のための教育かというところにどんどんつながっていくような気もしました。ちょっとかっこよくまとめ過ぎちゃったかもし

れませんけども、本当にそんな感じがしました。

ということで、もうぼちぼち終わらなきゃいけないので、では、本当の一言だけ。小国さん、石川さんで、知果さん、お願いします。一言。

【小国】 ありがとうございます。本当に難しいですね。自分の職場で、やっぱり黙る市民になってしまっているという自分自身についても反省しました。だから、一人一人が怒る主体になっていかなきゃいけないんだなということを改めて、身近なところで起きている人権侵害の問題に、敏感になっていくということ自体が非常に大事なんだなということを改めて、今日、自分自身の問題としても感じさせていただきました。ありがとうございました。(拍手)

【石川】 今日は、チカママのお話を聞いていただいてありがとうございます。上手には話せないですけど、でも、思ったのが、やっぱり私たちは学校に行って楽しい経験をさせていただいています。なので、群馬県内だったら、どこでも呼んでももらえたら、こういうこと、したよとか、何かそういうお話。行けるから、困っているお母さんがいたらつなげてほしいし、例えば困っている支援、支援したいけど、どうしていいか分からないから、でも、難しいって言うじゃん、みたいになるから、そういうときは何かお役に立てたらいいなと思うし、そういうことが、やれることが私たちは何かまた生きがいになっていくなと思うので、何かあったら、医療的ケアとか重度心身、あと、インクルーシブとか、そういうキーワードで、もしかしたらチカちゃんママに聞いたら、みたいなことがもしあれば、ぜひぜひ呼んでももらえれば、何か一緒に解決したいなと。微力ではありますが、思いましたので、これからもよろしくお願

いします。ありがとうございました。(拍手)

【崔】 最後に私、ちょっとだけ。また2月22日にD P Iと、あと、インクルーシブ群馬という団体を立ち上げて、いろいろやっています。また教育がテーマになるかと思うんですけども、また皆さんと、今度は高崎市の保健センター、市役所の近くの図書館があるところですけども、そこで行いますので、また、もしお時間あったらぜひ参加していただきたいと思います。

最後に、先ほどのユネスコのいい話をして、皆さん、使えるネタを提供して終

わりたいと思います。世界中の全ての人を持っているものは何だ？ 平仮名で3文字。「また言ったな」と言っていますけども、これは4年ぐらい使っているんですけどね。「ちがい」だそうですよ、「違い」。世界中の全ての人を持っているものは「違い」だそうです。これはユネスコさんが言っていますので、皆さんが何かしゃべるときとか、ぜひネタで使ってください。今日来てよかったですね。ということで終わりたいと思います。御清聴ありがとうございました。(拍手)



第 39 回 邑楽町平和展

邑楽町職員労働組合

令和 6 年 9 月 8 日（日）、邑楽町長柄公民館で「第 39 回 邑楽町平和展」が行われました。邑楽町平和展は邑楽町職員労働組合のうち、31 歳以下の組合員で構成される青年婦人部の人たちが中心となって行うイベントです。邑楽町平和展が始まったのは今から 40 年以上前に遡ります。コロナ禍の影響などにより中止となった年もありますが、邑楽町職労青年婦人部の伝統として、ほぼ毎年行われてきました。

○労働組合が平和活動を行う意義

労働組合は処遇改善を雇用主に訴える労使交渉を大きな目的としていますが、平

和は豊かな生活を送る礎であるため、反戦平和を訴えることも組合活動の目的の一つとなっています。

「先の戦禍を知り、後世に伝えていくことは自分たちの生活を守ることにつながる。戦前の軍国主義に戻ってはならない。」

この思いから、青年婦人部は組合活動の一環として昭和 57 年から平和活動に取り組んできました。当時は県内で多くの平和運動が実施されていましたが、残念ながらこのような取り組みを続けている労

働組合は年々減少しています。邑楽町職労の青年婦人部として、平和展を開催し続けることは価値のあるものだと考えています。

○これまでの平和展

邑楽町立図書館や邑楽町中央公民館を会場として、展示・講演・戦時食の配布・映画上映など様々な方法で開催してきました。

しかし、新型コロナウイルス感染症への懸念から 2020 年度・2021 年度は開催中止、2022 年度は冊子の作成と写真の展示という形で平和展を再開しました。2023 年度は「平和祈念展示資料館」（新宿区）への施設訪問を実施しました。2 年間の開催中止により、青年婦人部員一人一人が平和について学び直すことから始めようと考えたからです。その上で、施設訪問で学習した内容をまとめたパネルなどの展示を行いました。

○2024 年度の平和展

今年度の平和展は 5 年ぶりの休日開催となりました。今年度の平和展のテーマは「未来のために 今を考えよう」です。これまでの「過去の戦禍を伝える」ための



平和展から大きく視点を変え、持続可能な開発目標であるSDGsに関連付け、「未来のために今私たちができること」を来訪者に考えてもらうための平和展としました。

過去の戦禍を現代に伝えることはもちろん大切なことですが、戦争が起こる原因を考えると、それは時代の変化に伴って多種多様に変わっていきます。現代社会に潜む根本的な原因を探って、今私たちにできることを考えることは欠かすことができません。貧困や格差社会、エネルギー問題など、限りある資源を巡る問題は、現代社会において多くの争いを生み出しています。限りある資源についてみんなが考え、当事者意識を持ってもらうことこそが、これからの平和活動への大きな一歩になると考え、このようなテーマとなりました。

○来訪者に持続可能性と平和について考えてもらうためのテーマ

平和展当日は、会場を4つのテーマごとに分けてイベントを行いました。

「貧困部門」・・・世界には今でも多くの人たちが、その日食べるものすら手に入れられずに、飢えに苦しんでいます。貧困部門では、飢えに苦しむ人たちの現状と私たちとの格差を視覚的にわかりやすく伝えるため、パネル展示を行いました。



「経済部門」・・・私たちが普段何気なく行っている経済活動も、途上国の人たちの働きがあってのものです。しかし、先進国

の人たちがより良い経済活動をするために、途上国の人たちを搾取している現状もあります。この部門では、先進国と途上国の対等な取引によって生まれた「フェアトレード商品」の紹介と販売を行いました。



「エネルギー部門」・・・気候変動や資源の枯渇が問題となる現代では、ひとりでも多くの人たちが、エネルギー問題について向き合っていかなければなりません。この部門では、エネルギー問題について来訪者が楽しく学べるような体験型イベントとして「ペットボトルを再利用した発電キットづくり」「再生紙を使用した折り紙体験」を行いました。



「教育部門」・・・世界では今でも学校に通えない、質の高い教育を受けられない子どもたちがたくさんいます。この部門では、世界の教育格差について来訪者に楽しく学んでもらうために、会場内の随所に教育格差をテーマとしたパネルを設置し、ラリー形式で会場内を廻ってもらいました。



○平和活動を未来へと繋ぐために

平和展当日は老若男女たくさんの方が会場を訪れました。来訪者たちは、会場に設置された作品を見て廻るだけでなく、私たち邑楽町職労青年婦人部の部員たちとの交流も楽しんでいたように感じます。そうした交流から生まれた学びも多かったのではないのでしょうか。青年婦人部の部員たちにとっても、イベントの数ヶ月

前から準備に取り組み、部員同士で協力し合い、平和展当日は来訪者と交流することで、数多くのことを学ぶことができました。

先に述べたように、現在もこのような平和活動を行っている労働組合は少数となっています。ささいな取り組みではありますが、こうした取り組みの積み重ねによって、平和への思いが次世代へと繋がっていくことは間違いありません。新たな戦争経験者を生み出さないために、日本が唯一の被爆国であり続けるためにできることは何か。私たちの平和実現に向けた取り組みが一人でも多くの方に波及していくことを願います。



